You, Unlimited

Ryukoku University

RYUKOKU UNIVERSITY

Annual Activity Report 2022

Fieldwork : Toward Social Coexistence

龍谷大学 社会学部
2022 年度 社会共生実習 活動報告書

目次

ご あ い さ つ.....2

地域エンパワねっと・大津中央.....3

コミュニティの情報発信！レク龍 プロジェクト.....13

大学は社会共生に何ができるのか－文化財から“マネー”を創出する－.....21

農福連携で地域をつなぐ－「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」.....30

お寺の可能性を引き出そう！－社会におけるお寺の役割を考える－.....37

いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～.....49

多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～.....57

障がいをもつ子ども達の放課後支援.....68

自治体を PR してみる！.....75

発信情報.....81

ご　あ　い　さ　つ

2022 年度 社会共生実習担当者会議
議長　　大西 孝之

6 年目を迎えた 2022 年度の社会共生実習は、9 つのプロジェクトが運営され、99 名の受講生が参加しました。今年度も地域住民・自治体・企業・団体のみなさまのご理解とご協力をもちまして、受講生は各プロジェクトの担当教員とともに現場における課題について探究・解決を図ることができました。衷心より御礼申し上げます。

今年度の社会共生実習では、大学が定める「新型コロナウイルス感染防止の行動指針」によって学外での活動が中止されることなく、感染防止に最大限配慮しつつもコロナ禍以前に近いかたちで各プロジェクトが運営できました。また、現場での実習を中心としつつも、一昨年、昨年では活用せざるを得なかったオンラインを目的に応じて効果的に活用し、より充実したプログラムとすることができました。

本報告書では、その 1 年間の取り組みをプロジェクトごとにまとめております。ご高覧いただき、現代社会が抱える課題に対する理解と解決に向けた展望をみなさまと共有できましたら幸甚です。

社会学部は 2025 年度から深草キャンパスに移転し、現在の 3 学科を 1 学科に改組されることとなりますが、この社会共生実習は移転・改組後も学部教育の特色となる「プロジェクト制」の中心科目となる予定です。さらなるプログラムの発展のため、引き続きご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

2023 年 3 月

地域エンパワねっと・大津中央

担当教員：脇田健一

（1）取り組みの趣旨・目的

「地域エンパワねっと」（愛称は「大津エンパワねっと」）は 2007 年度、本学部が立地する大津市における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質的向上」、そして社会学部における「教学改革」の 3 つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代 GP」に採択され、社会学部の全学科（当時は 4 学科）共同で運営される「地域連携型教育プログラム」として発足した。学生と地域住民の皆さんが直接出会い、地域課題解決のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント（潜在化した力を引き出すこと）され学び合う関係を創出することを目指した。また、教員が学科の壁を越えて、教育上の連携を行う試みでもあった。本プログラムが起点となり、2016 年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながった。

本プロジェクトの最大の特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会のなかから発見し(課題発見)、学生が地域住民の皆さんとともに実際の課題解決のための実践に取り組む(課題解決)という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」に取り組むことは、学生にとっては極めて難易度が高いといわざるを得ない。そのため本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層（地元自治連合会役員等）とが、定期的に（原則毎月 1 回）開催する会合「大津エンパワねっとを進める会」を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有し、そのような情報共有に基づき学生たちの指導が行われてきた。また、地域住民の皆さんと共に「報告会」を開催し、活動の振り返りを行ってきた。通常、この報告会は前期と後期の終盤にそれぞれ 1 回開催され、学生は地域住民の皆さんの前でプレゼンテーションを行い、地域住民の皆さんからはコメントやアドバイスをいただいてきた。

ただし、ここ数年で、本プロジェクトの背景については大きな変化があった。2000 年度から始まった新型コロナ感染拡大に伴い、本プロジェクトを地域連携型と位置付ける上で重視してきた「大津エンパワねっとを進める会」や「報告会」の開催が困難である状況が続いている。また、2021 年度からは、本プロジェクトが位置付けられていた旧カリキュラムや資格課程が制度としては終了した。そのため、それまで本プロジェクトと合同で開講していた「地域エンパワねっと・瀬田東」とは、別々のプロジェクトとして開講されることになり、本プロジェクトは、完全に「社会共生実習」の他のプログラムと同じ位置付けになった。さらに、2022 年度には「地域エンパワねっと・瀬田東」は諸般の事情から不開

講となり、2007 年度に始まった「現代 GP」「大津エンパワねっと」の流れを汲むプロジェクトは、本プロジェクトだけになった。とはいえ、カリキュラム改革を経た後も、一貫して「課題発見×課題解決」型を堅持していることに変わりはない。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

2022 年度の「地域エンパワねっと・大津中央」には、2 回生 3 名、3 回生 6 名が履修した。しかしながら、1 人の受講生が後期の履修を辞退することになった。「社会共生実習」は、他の科目とは異なり、履修辞退制度が適応されないことになっているが、海外に留学するという理由により、特別に履修辞退が認められた。

本年度は昨年度と同様に、新型コロナウイルスの感染拡大の中での取り組みとなり、前期は学外に出て地域の皆さんと一緒に活発に活動を行うことはできなかった。しかしながら、中央学区自治連合会顧問の安孫子邦夫氏に、中央学区の概要や課題、コロナ禍における地域活動の状況等についてご講義いただいた。また、中央学区子ども会育成連絡協議会の下清水千香子氏には、地域の子どもを育む様々な活動についてご説明いただいた。大津市の中心市街地の歴史、自治会等の地域社会の仕組み一般については、担当教員が講義をおこなった。また、2 回にわけて中央学区を含む中心市街地のまち歩きを行った。

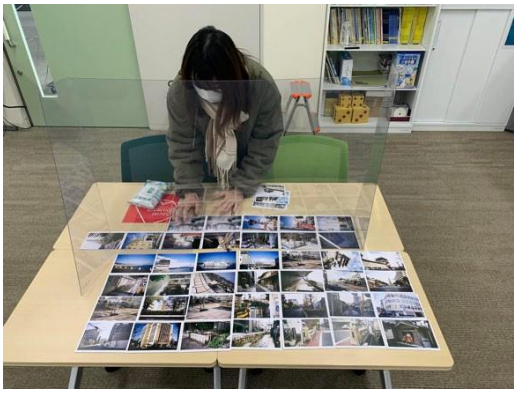
例年であれば、4 月に簡単なオリエンテーションを行ったうえで、5 月の大型連休前後には「地域デビュー」を行い、自治活動や地域福祉活動に関わる諸団体の皆さんとの出会いの場をつくってきたわけだが、コロナ禍により前期の活動が不十分なものになってしまった。前項で説明した「大津エンパワねっとを進める会」も、前年度と同様に、開催することができなかった。

ただし、学外での活動が不十分はあったが、グループワークにかなりの時間をかけて、お互いの問題関心を知ることに十分な時間をあてた。その結果、安孫子氏や下清水氏のお話、担当教員の講義やまち歩きの経験から、「高齢者」と「子ども」というキーワードで、履修者が 2 つにわかれてグループを作ることになった(「高齢者」のグループは 3 人、「子ども」のグループは 5 人)。2 つのグループは、夏期休暇中もそれぞれオンラインでミーティングを重ね、自分たちの課題発見にもとづき、後期で取り組む企画の中身を具体化させていった。

その結果、「高齢者」グループは、中央学区の高齢者の皆さんと連携しながら、2023 年 2 月 11 日・12 日の両日、丸屋町商店街の中にある「大津百町館」で、写真展「中央の記憶 レトロ写真展」を開催することができた。この写真展は、レンズ付きフィルムを活用したユニークな企画で、ご参加いただいた高齢者の皆さんから高い評価をいただいた。また、「子ども」グループは、大津市立中央小学校の先生、そして地域の皆様からのご支援をいただき、2 月 24 日に小学校の体育館で、牛乳パックを再利用したイベント「願い事ランタンで交流しよう in 大津市立中央小学校体育館」を開催することができた。コロナ禍でたくさんのイベントが中止になる中、参加者の皆さんに喜んでいただけた。

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

【中央の記憶 レトロ写真展】



写真展の準備

写真展の準備段階で、「中央カメラリレー」を実施した。写真を撮影するために、スマホを使用せず、昔流行った「写ルンです」というレンズ付きフィルム(使い捨てカメラ)を使用した。撮影してくださる方達を、一台の「写ルンです」を数人でレリーしていただき、それぞれの思い出のある場所の写真を撮っていただいた。「レトロ写真展」とはいえ、撮影した対象自体は現在のものだ。そこに自分の昔の思い出が込められているからレトロなのである。以下は、この写真の開催趣旨である。

「長い歴史のある大津市中央学区には、多くの人々が住んでいます。生まれた時からこの地に住む人。働くためにこの地に来た人。故郷であるこの地に帰ってきた人。その一人ひとりに、中央学区での記憶、思い出、歴史があります。思い出の地を写真に収め、それぞれの想いを共有することで、人と人をつなぐことができないかと考え、写真展を企画するにいたりました。」

写真展ではあるが、美術館等で開催される写真展とは異なっている。一つひとつの作品について、学生たちは撮影した方たちから丁寧にお話を伺った。そして伺ったお話を作品の下にコンパクトにまとめて掲載しました。それをご覧になった方たちも、「ああ、そうやった」、「自分の場合はこうやった」と会場でいろいろお話をされるのである。写真が、

昔話を語る来場者とお話を伺う学生

人と人の間に、人と地域の間に眠っていた記憶を呼び起こしていった。また、作品として展示した写真をハガキにも印刷して準備を行った。コロナでなかなか会えない人たちに、あえてこのハガキでメッセージを送ってみませんかと来場者に呼びかけた。

この写真展については、読売・京都・中日新聞の三社から取材を受けた。その記事を読んで二日目にご来場くださった方も多数おられた。結果として、二日間で 170 人の皆さんにお越しいただくことができた。

【願い事ランタンで交流しよう】

ランタンづくりの様子

コロナのために様々な地域イベントが中止になるなか、今回の「願い事ランタンで交流しよう」が少しでも参加された子どもの皆さんの心に残るものとなり、さらには自分の住んでいる地域に愛着を持つことにもつながればとの思いから企画された。イベントで用いたランタンは、牛乳パックを再利用したシェードと小さな LED ライトでできている。たくさんの牛乳パックが必要になるため、龍谷大学学生生協にもご協力いただき数を揃えた。当日は、学生たちがあらかじめ作成したランタンに、小学生の皆さんの願い事を書いたランタンが加わった。当日は、130 人程の皆さんが、お越しくださった。小学生の皆さんは、普段、体育で使っている体育館の雰囲気が一変することに驚かれたようだ。照明を消すと、「キャー」という感動の叫び声が体育館に響いた。保護者の皆さん、地域の皆さんにもご満足いただけた。小学生の皆さんや、保護者や地域の皆さんに、「みんなで力を合わせればこんなに楽しいことができるんだ」ということを実感していただけたのではないかと思う。

なお、この「願い事ランタンで交流しよう」についても中日新聞の取材をいただくことができた。

以上のように、2 つのチームの取り組みは、地域の皆さんから高く評価していただくことができた。しかし、そこに課題がなかったわけではない。ひとつは、チーム内部でのコミュニケーションに関わる問題である。特に、人数が多かった「子ども」のチームは、意見交換、合意形成を行い、企画をまとめるのに多少時間がかかったように思う。そのこととも関連するが、そして地域の皆さんとのコミュニケーションが後回しになりがちであったことも問題があったように思う。本来であれば、地域の皆さんと十分なコミュニケーションと、チーム内部でのコミュニケーションを、同時並行的に行いながら、企画を詰め、少しずつ準備を進めていく順応的なプロセスが必要であったわけだが、その点が少し不十分であったのかもしれない。ただ、そのような「少し辛い体験」をすることも含めて、「課題発見×課題解決」型である「地域エンパワねっと・大津中央」の学びなのかもしれない。

報告会プレゼンテーション資料①

地域エンパワネット
大津中央

宮地きえ・新川真緒・小森明日花

地域の課題　大津市中央学区

自治連合会顧問、安孫子さんのお話

数多くの高齢者の方が生活
その中には
あまり地域と関わりを持たず、
家に引きこもりがちな方が
増えてきている。

写真で人と人をつなぐ

高齢者の方がお互いに交流できる場を設け、
地域に足を運ぶきっかけづくりができないかと考えた。

使い捨てカメラを使用し、
地域の方たちで作り上げる写真展を開催
写真展を準備する過程で高齢者同士の交流を増やしたい！

使い捨てカメラを使用した理由

- 携帯での撮影にはない魅力
  昔ながらのレトロな雰囲気と
  どんな写真が撮れているのか
  わからないドキドキ感
- 写真をデータ化し、携帯に転送
  写真展のために大きく現像したり、
  ハガキに印刷したりと
  様々な活用ができる

第一部：地域の皆さんでつなぐ「中央カメラリレー」

- 使い捨てカメラを受け渡す際に写真の思い出を共有してもらう。

第二部：お茶会で写真の思い出インタビュー

- 撮影した写真に込められた思い出をインタビュー。

第三部：写真展＆ハガキを送ろう　（場所：大津百町館）

- 聞き取りした思い出とともに写真を展示。
- 写真で絵はがきも用意し、メッセージを送れるようにする。

最終目標

・写真は思い出を語るきっかけを作る。
・同じ地域に住む人同士、写真を通して交流を促す。
・地域の方が地域の良さを感じられるような展示にする。

ポスター①

写真で人と人をつなぐ

宮地・新川・小森

大津市中央学区の自治連合会会長を10年間務めた安孫子邦夫さんに中央学区（大津市）の地域の課題を伺った。中央学区には、数多くの高齢者の方が生活しているが、あまり地域と関わりを持たず、家に引きこもりがちな方が増えてきているという。そこで、高齢者の方がお互いに交流できる場を設け、地域に足を運ぶきっかけづくりができないかと考えた。

イベントの企画

使い捨てカメラを使用し、地域の方たちで作り上げる写真展を開催
写真展を準備する過程で高齢者同士の交流を増やしたい！

第一部：地域の皆さんでつなぐ「中央カメラリレー」
使い捨てカメラを受け渡す際に写真の思い出を共有してもらう。

第二部：お茶会で写真の思い出インタビュー
撮影した写真に込められた思い出をインタビュー。

第三部：写真展＆ハガキを送ろう
聞き取りした思い出とともに写真を展示。
写真で絵はがきも用意し、メッセージを送れるようにする。

第一部の目的と準備

地域でつなぐ「中央カメラリレー」とは？

展示する写真を集めるうえでも
交流する機会を生むことができないかと思い企画

地域に足を運ぶ
カメラを受け渡す
写真の思い出を共有
↓
参加者同士が交流するきっかけを
作れるのではないか

チラシを作成し、
参加者の募集を行いました！

参加者に向けて企画説明会を実施

チラシ配りだけでは参加者を集めるのに難航したが、
地域の方の協力もあり、15人の方に集まっていただいた。
3チームに分かれ、それぞれカメラリレーを行っていただいた。
現在、第2部・第3部に向けて準備を進めている。

各チームに配布する
カメラには
「写ルンです」を使用

企画を実施するうえで苦労した点

・企画に賛同してくださる参加者を集めること。

・本来は、普段から地域との交流が少ない人にも楽しんでもらうことを目的にしていたが、普段から地域との交流が少ない人にイベントに参加してもらうことが難しかった。

・商店街や住宅街に何度も足を運び、地域の人々とコミュニケーショを図りながら、広報活動を実施した。

達成目標

今回の企画を通して
・写真は思い出を語るきっかけを作る。
・同じ地域に住む人同士、写真を通して交流を促す。
・地域の方が住む地域の良さを感じられるような展示にする。
これから開催予定の写真展では、
より多くの人々が交流できるような内容にしていきたい。

報告会プレゼンテーション資料②

願い事ランタンで交流しよう

地域エンパワねっと・大津中央
福井・山添・長谷川・斎藤・宝本

大津市中央学区の課題

大津中央学区でのまちあるき

子どもたちが安全に遊べる場所が少ないのでは？

子ども会育成連絡協議会の下清水千香子さんからお話を伺う

昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響により子どもたちが主体となるイベントが中止になっていることを知る

企画の内容

身近にある牛乳パックを再利用したランタンイベントを開催し、子どもたち同士が主体的に交流できる場をつくろう！！

世代を超えた地域の方々との交流の機会にも！

準備の様子

牛乳パック試作品づくり

実際に暗い部屋で試している様子

願い事ランタンのイベント概要

中央小学校の校長先生から子どもたちがもっと主体的にイベントに参加できる方が良いというアドバイスを頂き、工作スペースを作ることに

ランタンは、各自持ち寄った牛乳パックを用いて工作スペースでオリジナルのランタンを作ってもらう（願い事を書いてもらう）

形はお花畑をイメージしており、子どもたちの願いや目標が」「花開くように」願いを込める

大津市立中央小学校の体育館をお借りして、ランタンイベントを開催！

今後のスケジュール

1月　参加希望者アンケートを配布、回収
　　体育館使用に関して、小学校の校長先生との相談

2月　イベントリハーサル
　　イベント実施

ポスター②

願い事ランタンで交流しよう

福井・山添・長谷川・斎藤・宝元

私たちは大津市中央学区のまち歩きを行う中で、子どもたちが安心して遊べる場所が少ないということに気づいた。また、子ども会育成連絡協議会の下清水千香子さんにお話をお伺いしたところ、昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響により子どもたちが主体となるイベントが中止になっていることも知った。そこで、子どもたち同士が交流できるイベントを開催することで、子どもたちが来年に向けて少しでも希望を持てるのではないかと考えた。

中央学区の課題

・大津市の中心市街地であることから、子どもが安心して遊べる場所が少ない！
・コロナの影響でさまざまなイベントが中止に！

企画の内容

身近にある牛乳パックを再利用したランタンイベントを開催し、子どもたち同士が主体的に交流できる場をつくろう！！

↓

・牛乳パックに願い事を書いてもらい、新年度に向けて子どもたちの願いが叶うように！
・世代を超えた地域の方々との交流の機会にも！

牛乳パック試作品づくり

実際に暗い部屋で試している様子

願い事ランタンのイベント概要

大津市立中央小学校の体育館をお借りして、ランタンイベントを開催！

ランタンは、各自持ち寄った牛乳パックを用いて工作スペースでオリジナルのランタンを作ってもらう（願い事を書いてもらう）

中央学区の校長先生から子どもたちがもっと主体的にイベント参加できる方が良いとアドバイスを頂き、工作スペースを作ることにしました！

形はお花畑をイメージしており、子どもたちの願いや目標が
「花開くように」願いを込める

今後のスケジュール

1月　参加者希望者アンケートを配布、回収
　　体育館使用について、大津市立中央小学校の校長先生と相談
2月　イベントリハーサル
　　イベント実施

コミュニティの情報発信！レク龍 プロジェクト

担当教員：久保和之

（1）取り組みの趣旨・目的

コミュニティの広報活動を学ぶために、各種事業に参加する。事業の補助や広報活動業務を実際に見て体験して学ぶ。社会の少子高齢化や情報化が進むとともにコロナ禍において、地方のレクリエーション協会では、スタッフの高齢化が進み、業務活動の継続が困難な状況が生じ始めている。社会的な組織の重要な業務の一つに広報活動があり、それを担う人材の育成が重要視されてきている。そこで、地方団体の広報活動について、実践を通して学んでいく。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

①滋賀県レクリエーション協会　運営指導部会に参加

初回の会議で自己紹介

書記なども体験

②広報部の SNS 発信

「Twitter」「Instagram」「Facebook」の滋賀県レクリエーション協会の公式アカウントを作成し、活動紹介や大会の情報などを発信した。

Twitter　ID：shiga_rec

Instagram　ID：shiga_rec

Facebook　ID：滋賀レク

Twitter

Instagram

Facebook

③大津市真野浜にてフロートレース「浮き輪で GO！」開催

下見で実地検分

フロート試乗

リハーサル

使用したフロート

受付の様子

レースの様子

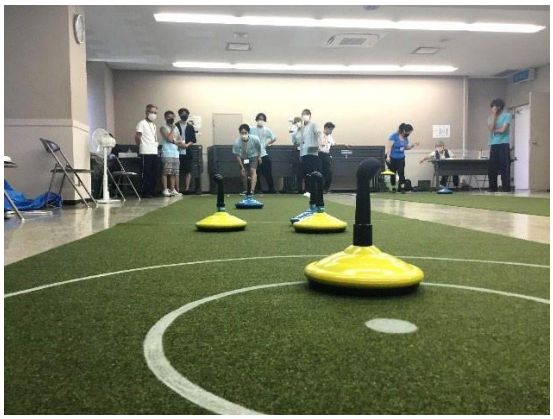
④指導者養成講習会への参加および取材

講習会の様子

実際にゲームを体験

ゲームの様子

広報用の写真撮影



ユニカールの体験

会場の準備・撤収

モルックの準備

モルックの取材

テント設営講習

テント設営体験

⑤ホームページ作成

広報ツールとしてのＷＥＢ発信について理解するために、自分たちのプロジェクト紹介のウェブページを作成した。ホームページの仕組みについて学び、実際にＨＴＭＬのタグを使い、プログラミングを体験した。

⑥会報誌の作成

滋賀県レクリエーション協会の会員向けのお便りの原稿を作成した。広報部の一員として活動してきた SNS 発信の紹介や SNS の操作方法、滋賀県レクリエーション大会の報告など、自分たちで取材をして、記事にまとめた。紙面の割り付けや編集作業の補助をおこなった。また、広報誌の袋詰めや宛名シール貼りなど発送作業についても学んだ。

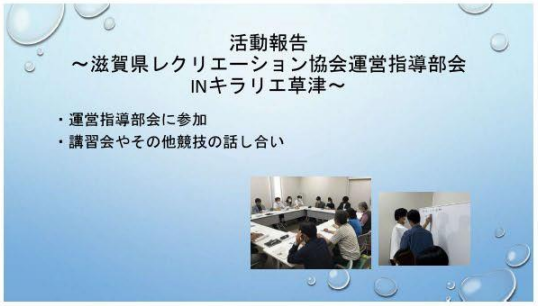
（３）2022 年度の取り組みの成果と課題

本プロジェクトは今年度から始まったので、手探り状態の中でスタートしました。結果としては、十分な成果があったように思われる。まずは、何度も現場に出向いてたくさんのことを見聞きできた。机上の空論ではなく、実際に活動することによって、それぞれの事業について大変なことが身をもって理解できた。滋賀県レクリエーション協会というあるコミュニティの情報発信がメインであったが、まずは現状を知ってもらい様々な課題があることを認識できただけでも意義があったと思われる。

課題としては、提供したコンテンツ（学習内容）の数が多くて、それぞれの活動が消化不良気味だったことである。各コンテンツについてグループや担当を決めて活動していくと、もう少しスムーズに理解が進むのだが、どうしても受講生の知識とスキルが不足しているので、全員がすべてを学習しながら進めていった。

次年度以降は、ホームページと広報誌の大幅刷新を考えている。それぞれを突き詰めれば、時間とお金が不足していることが予想される。本実習以外の学業や課外活動などとの兼ね合いでどれだけ活動時間が確保できるかが大きな課題である。

報告会プレゼンテーション資料



活動報告
～授業内～
・レク龍Tシャツの作成

ご清聴ありがとうございました

ポスター

社会共生実習
～レク龍プロジェクト～

・1.広報活動

「レクリエーションを多くの人に知ってもらうこと」を目標に、広報を学ぶ活動として滋賀県レクリエーション協会（滋賀レク）の広報のお手伝いをさせていただきました。

〇主な広報活動
・滋賀レクのSNS活用
・滋賀レクの広報誌の作成

レクリエーションの認知度が低いこと、特に若者に知られていないことが課題として挙げられ、レクリエーションの楽しさを多くの人に知ってほしいという気持ちで活動しています。
来年度はより広報に力を入れSNS等を通じて、多くの人にレクリエーションを知ってもらうことが課題です

・2.学生企画：浮き輪レース

八月には私たちレク龍生が企画した浮き輪レースを行いました。

『浮き輪レースとは二人一組になって一人が浮き輪に乗って、もう一人がその浮き輪を引っ張りタイムを競うレースである。】

浮き輪レースの横では「ゴザ走り」という真野浜水泳浴場で開催されている琵琶湖の上に敷かれたゴザの上を走る協議が行われており、たくさんの方が参加してくれました。
準備段階では、各自が本番どのように動くのか、役割分担やルールの設定などを決めました。本番では思うように進まないこともあり、様々な想定に備えて準備をすることが必要であることを身に染みて感じました。

・3.インストラクター養成講習会

私たちレク龍メンバーは、レクリエーションインスタクターの資格を得るための必要な講習のお手伝いに参加しています。実際にゲームを考えて前に立って発表したりしました。レクリエーションは老若男女が楽しめるものとなっています。そのため、ご高齢の方や小さな子供たちへの配慮の仕方など私たちが思っている以上に指導にはテクニックが必要だと感じました。また、火打石を使った火おこしやキャンプなどで使えるテントの設営など私たち若年層には馴染みのなかったことを体験することができました。私自身レクリエーションを体験して非常に楽しかったです。

また、この楽しさを多くの人に知ってもらうべく滋賀県レクリエーション協会の皆さんと積極的に意見交換を行ったりもしています。

大学は社会共生に何ができるのか

－文化財から“マネー”を創出する－

担当教員：髙田満彦

（1）取り組みの趣旨・目的

文化財の有効活用、特に観光における活用促進の機運が近年高まり、2019 年 4 月には文化財保護法が改正・施行された。滋賀県は日本遺産や文化財等有形無形の文化財を京都、奈良に次いで数多く有しながら、これらの地域に匹敵する経済効果を生み出していない。殊に大津は国際観光都市京都に隣接する位置にありながら観光業等において経済効果が低い。何が課題で、それをどのように解決すればよいのか。本プロジェクトは次の目的をもって開講している。

① 大津が持てる文化財というリソースの強みを観光資源として生かしながら、マネーを創出する方策を考える。

② 行政からの政策待ちではなく、民間企業やNPO と連携しながら、これらを貴重なリソースとして生かす方法、各組織の連携の在り方等を考える。

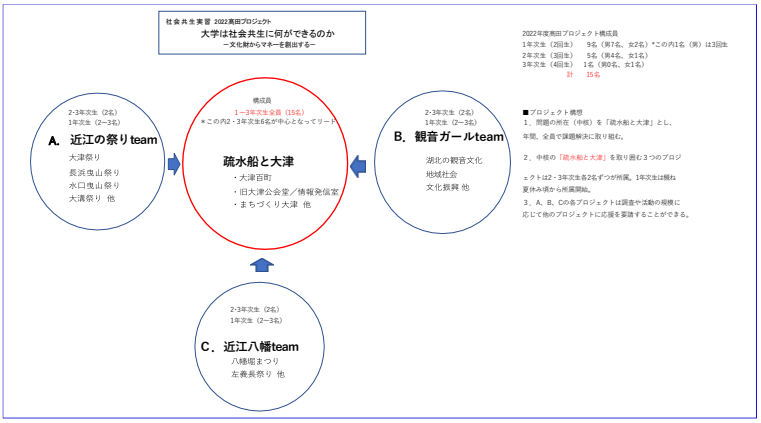
③ 取り組みの先進地や研究対象地域・大津を大学生の柔軟な発想を生かして実際に歩き、体験を通して問題の解決に取り組む。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

今年度で 3 年目を迎えたコロナ禍も市中では猛威を振るったものの、本プロジェクトの中核となるフィールドワークはほとんど影響を受けることなく、ほぼ予定通り終えることができた。

2022 年度は「参画」と「発信」を活動目標に掲げ、「疏水船と大津」をテーマの中心として、「近江の祭りチーム」、「観音ガールチーム」、「近江八幡チーム」の３つのチームを編成し、活動を展開した。受講生はこれまでの蓄積を活かし、当初からのテーマである「大学は社会共生に何ができるのか―文化財からマネーを創出する―」のもと、チームごとの活動と中核を占める「疏水船と大津」の活動を両立させ、活発且つ組織的に活動を展開した。

【活動のフロー図】



【寺院の奥座敷—長浜・大通寺—】

【文化財の見方を知る—坂本・比叡山—】

【ジオラマから大津宮の構造を見る—大津歴博—】

【聞き取り調査前の打合せ—大津祭—】

【オンラインによる愛媛大学との研究交流】

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

＜成果＞

① 今年度の活動はスポットで入る「参加」ではなく、学外の様々な人たちと時間をかけて計画を検討し、練り上げ、実行するという「参画」のプロセスに沿って意欲的に活動した。また、振り返りとしての「評価」もおこなった。その結果、学生たちの取り組みがメディアに紹介され、自分たちの発案した商品（ガイドツアー）によりマネー創出に漕ぎつけるという成果も生まれた。

② 他大学（愛媛大学社会共創学部）との研究交流が軌道に乗り、受講生の新たな気づきにつながった。新しく嵯峨美術大学芸術学部との交流を開始し、本プロジェクトの活動に「アート」の視点が加わった。

③ 担当教員の退任に伴い本プロジェクト最終年度になったが、受講生たちの希望により、学内一般同好会（サークル）を立ち上げ、次年度以降も構成員をほぼ同じメンバーにして活動を続けることになった。新サークルの名称を「文化財継承・活用プロジェクト『雅』」と決定し、部長、副部長にこれまで高田プロジェクトがお世話になった方々にお願いし、ご快諾いただいた。

＜課題＞

新年度からサークルとしての活動へ移行するが、課題に対してどのように主体的に取り組むか、組織的な動きをどう創出していくか、活動の財源をどのように確保していくかなど本学の他のサークルが持つ課題を共有していくことになる。受講生たちの斬新なアイデアと粘り強さで新たな活動を創出してほしい。

報告会プレゼンテーション資料

2022年度　社会共生実習　合同報告会

文化財からマネーを創出する

2022年度　龍谷大学社会共生実習 髙田プロジェクト

発表の流れ

①髙田プロジェクト「文化財からマネーを創出する」のテーマについて

②今年度の活動内容について

- （全体の取り組み）疏水船と大津
- （各チームの取り組み）近江の祭り、観音ガール、近江八幡

③嵯峨美術大学との交流会について

④愛媛大学との交流会について

髙田プロジェクトのテーマについて

文化財は現状を維持したまま後世に伝える「**保存**」と、広く社会に認知してもらう「**活用**」の2つのバランスを保つことで価値を持つ。

↓しかし…

文化財の活用はその保存を確保できる範囲でしか出来ない。

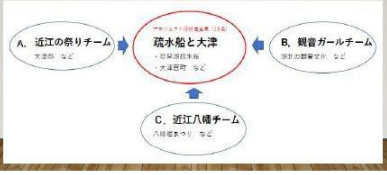
↓なぜ？

文化財の劣化や、歴史的な街並みを支える地域住民の生活を壊してしまう可能性があるから。

髙田プロジェクトでは、専門家を招いての講話やフィールドワークを通して「保存」と「活用」を両立し、かつそこからマネーを創出する新しい方法を考えている

今年度の活動内容について

「疏水船と大津」のテーマには履修生（15名）全員で取り組み、個人の興味分野に合わせてA,B,Cの各チームに5名ずつ所属



疏水船と大津

- 活動目標：企画のプレスリリース（新聞やNHKの取材）
- 大津市役所（観光振興課）の方々と6月24日にミーティングを行い、その後メールでのやり取りを行った。
- 2回生は11月20日に琵琶湖疏水船に乗船した。

提案と回答

- 夜に疏水船を運航すること
  ⇒不可能ではないがお金がかかる。安全面の整備や周辺地域へのエンジン音の配慮が必要。
- 大津側の降り場にお土産屋などの設置
  ⇒土地の許可や保健所の許可が必要。経営の問題がある。
- 船上での飲み物の提供
  ⇒浄水施設の1つなので水道局の許可がでない。

提案と回答

- 当日券の販売
  ⇒お金の管理や人件費、PRなどの仕組み作りが必要。
- 仮説の観光案内所の設置
  ⇒実施する以上どのような効果があったかをアンケート調査などで測る必要性がある。
- 疏水船のバリアフリー化
  ⇒身障者に対する配慮が一切ない。検証しないといけない。

近江の祭りチーム　～大津祭～

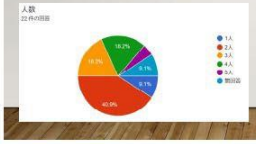
- 活動目標：大津祭と地域住民の関わりから発見した課題に参画する
- 大津祭当日には、①宵宮演奏体験の実施、②アンケート調査、③曳き手参加を行った
- 大津祭曳山連盟理事長の元田さんにご協力いただき、6月3日から9月26日の間に5回面談を実施

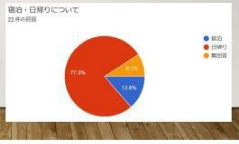
大津祭に使用したアンケート調査用紙

・調査日：10月8日（土）・9日（日）
・調査目的：大津祭に対する印象・参加理由・参画経験を知るため
・調査方法：大津祭に訪れていた方に直接インタビュー

大津祭アンケート調査結果から

- 調査回答者の総数は22名
  ⇒回答者の性別は、ほぼ男女半数ずつ
- 一緒に来ていた人数は「2人」と回答した人が最も多い
- 4分の3以上が日帰りでの参加

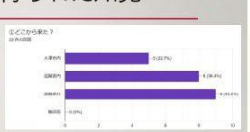


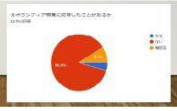


アンケート調査から得られた知見

・大津市以外からの参加者が予想以上に多い。県外から来た人の多くは「昔、大津に居住していたから」「久しぶりに参加したいから」と回答。
⇒現在の居住地は異なっていても、大津祭に参加するほど地域に対する愛着が強い。

・大津祭ではボランティアで参加することが可能だが、その制度を知っている人が少ない。
⇒「ある」と回答した人は1名のみ。今後、ボランティア参加の認知をどう高めるかが課題。





観音ガールチーム　～湖北の観音文化～

- 活動目標：湖北の実態を知り、観音文化の保存と活用を発信する
- 對馬佳菜子（観音ガール）さんの協力のもと、7月11日から9月11日の間に6回フィールドワークを行った
- 11月6日に世話方さんに向けてトークイベントを開催
- 今後、他の地域住民の方と交流会を行う予定

「観音の里」「湖北の観音文化」の魅力

- 伊吹山や己高山などの山々や琵琶湖、余呉湖があり、自然に包まれていて、静かな雰囲気があり、“ふるさと”を感じることができる
- 歴史的に北國街道や湖上交通の要所、通過地点であるため、文化の行き来が多い地域だった。このため、様々な文化が見られる
- 地元の人々には、観音様やお地蔵様などに手を合わせる習慣があり、日々の報告や感謝の気持ちを伝えるなど日常生活の中に自然に溶け込んでおり、他の地域ではあまり見受けられない習慣なので、湖北らしい文化だと感じる。

ＦＷから得られた知見

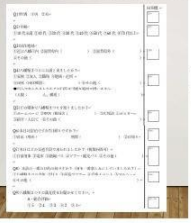
- 文化財の保存と活用のバランスをとることがとても難しく、保存の比重が高くなることは必然的であるが、私たちはどこまで活用に重きを置くか考えなければならないと思った。
  　飯福観音堂では、拝観者よりもご利益を求めた祈願者のほうが多いとお聞きしたので、そういう場合、保存の方に重きを置いたほうがよいのかなと考える。
- 行政の文化財担当や所蔵者など文化財に関わる人は、それぞれの文化財、地域の特徴を理解し、ターゲットとなる層を考えながら特徴にあった活用の仕方を考えなければならない。
- 各地域の人は、知名度を広げることで見に来てもらえるようにする。見に来てもらうことが出来たら観光客がよりその文化財の魅力を感じることができる

近江八幡チーム　～八幡堀まつり～

- 活動目標：八幡堀まつりに会議や準備の段階から参画することで地域の祭りを観察するよりも更に深く地域住民と祭りの関係やマネーの生み出し方を学ぶ。
- 八幡堀まつりの会議である近江八幡観光物産委員会に出席し、祭りでの龍大生の役割を決める、八幡堀まつりで使う竹やぐらの設置、フォトコンテストの企画、写真の選定、祭り当日のつまみ食いツアーである夜遊びツアーの実施、高田プロジェクト山本のマルシェでの演奏、八幡堀まつりアンケートの実施
- 事前打ち合わせ　6月9日～10月19日の期間に8回実施

八幡堀まつりに使用したアンケート調査用紙

・調査日：10月22日（土）・23日（日）
・調査目的：八幡堀まつりの来場者の目的や居住地を調査し、次年度以降の八幡堀まつりの方針に役立てるため
・調査方法：高田プロジェクト履修生による聞き取り / 白雲館に設置



アンケート調査、八幡堀まつり参画から得られた知見

- 八幡堀まつりは夜に行われる祭りであるため、聞き取り調査をすると雰囲気が崩れてしまうので書き取り式のアンケートが望ましい。
- 県内や市内の住民からの知名度は十分にあり、地域に根差した祭りとしてやっていくには、ちょうどいい状態である（アンケートから判断）
- 上とは逆に今より大規模な祭りにし、地域の財政を担う祭りにしようとすると現在のボランティアや観光物産委員会に加入している住民だけではなく、市の職員など安定した参画者が必要であると感じた。

八幡堀まつりの様子

嵯峨美術大学との交流会

- 京都フィールドワーク2日目、嵯峨美術大学の方々との交流会。
  →嵯峨美術大学は、文化財や観光に対してアカデミックな視点を持たない相違点。
- 地元への誇りを持った活動…**嵐山の人は地元に誇りを持っている**
- テーマ別の3チームでディスカッションを行う。

チームA　「祭りに対する考え、少子高齢化時代での祭りの継続について」
結論：祭りは成長に伴って関心が薄れることが多いため、特別感のある工夫が必要。

チームB　「文化財・観光資源と地域の人の関わり方」
結論：地域の人に主体性、そして誇りを持って文化財・観光資源と関わることが理想。

チームC　「ガイドの価値」
結論：観光の目的や学習意欲、ガイドの対象や集団か否かなどからニーズが決まる。

嵯峨美術大学の発表とディスカッションで得られた知見

- 嵯峨美術大学では、デザインとSNSを観光と絡めた活動を行っている。

…LINEで作成した体験型謎解きゲーム等

→これまでの龍谷大学の文化財観光活用案とは異なるアプローチ

シルエットや謎解きの方法を参考に大津市役所（都市魅力づくり推進課）と協力し、大津百町周辺のクイズラリーを企画。

愛媛大学との交流会

- 愛媛県伊予郡砥部町をフィールドとする愛媛大学生の方々とのリモート交流会。
  →龍谷大学は既存の文化財を扱い、愛媛大学は新しく発掘する相違点。
- 砥部町の地元の人たちや高校での交流会を実施し、成果を発表。
- それぞれのチームごとにzoomで交流。

チーム1
「FW等で学んだ様々な文化財に着目したより良い文化財との関わり方。」

チーム2
「地域社会において、どのように地域の人達と共に文化財を保存・活用していくか。」

チーム3
「①文化資源、地域資源の子供たちへの継承の仕方②高齢化が進む中で歴史や文化をどのように継承していくか。」

結論と、交流会で得られた知見

- チーム1
  文化財の過去と現在の状況全体を概観し、個性・特徴を生かした関わり方。
- チーム2
  地域によって保存状態の差があり、地域をないがしろにしない活用を考えるべき。
- チーム3
  地域資源や文化財を子供達や地域の人達に還元する必要がある。

大学が在する地域性を考慮した文化財との関わり方を提案し、その地域に通した文化財の保存・活用、または認知に向けた活動を模索する必要がある。

今後の課題

- 今年度は文化財を活用することに注力した。しかし、それからマネーを創出する方向にはつなげられていない。

収益をあげられるようにする

なぜ：保存などにはお金がかかる。収益を得て、それをさらなる保存につなげるというサイクルが重要。

ご清聴ありがとうございました！

龍谷大学社会共生実習 髙田プロジェクト

ポスター①

観音ガール×龍大生の実習日記

プロジェクト紹介

龍谷大学社会学部のカリキュラムである社会共生実習で「文化財から“マネー”を創出する」というテーマで活動を行っています。

そのうちの一つのチームである私たちの湖北の観音文化チームでは、對馬佳菜子さん（観音ガール）にご協力いただき、観音文化に関することを調査しています。一見、大津とはあまり関係のないように思われるこの地域ですが、保存と活用を考えていく上で、その地域の独自性を維持していくことの難しさなど、大津と共通する課題を調査していくことで、全体の活動に活かしています。

大通寺にて

黒壁スクエアにて

湖北の魅力、観音様の魅力

湖北は、伊吹山などの山々や琵琶湖、余呉湖があり、自然に包まれていて、静かな雰囲気があり、“ふるさと”を感じることができます。琵琶湖の湖岸の地域のほとんどに見受けられますが、歴史的に水運の要所、通過地点であるため、文化の伝来が多い地域でした。ゆえに、様々な文化が見られます。

仏像は、光のあたり方や見る角度によって感じ方が違い、神秘的に見えたり、幻想的に見えたり、様々な表情を見ることができます。見ていると安心感が得られたり、癒されます。湖北の方々は、観音様やお地蔵様に手を合わせる習慣があり、他の地域ではあまり見受けられない習慣なので、湖北特有の文化だと感じました。

観音様を間近で拝むことができるのも湖北の観音文化の魅力の1つです。博物館などで観音様を拝む際には感じることのできない空気を感じることができます。その感覚は言葉で言い表せないものがあります。

安念寺にて

フィールドワークを行って、感じたことや考えたことについて保存と活用の2点に重きを置き、私たちが考えた課題点などを示します。

文化財の保存について

文化財を保存するということは、地域の信仰や俗習を後世に伝えていくことであり、歴史を伝承する重要なものだと考える。ですが、国、県、市の文化財指定を受けていると修繕費に対する補助金は出ますが、自治会などにとって重い負担になっていたり、自治会での賛成を得られなければ、費用を捻出することができないことも多いそうです。地域内での価値観の違いがあり、なかなか賛成多数にならない場合もあります。文化財指定を受けないことで自由に改修できる面もありますが、かといって「自由に管理できるなら文化財指定を受けなくても良い」という結論になってもいけないと我々は考えています。

現在、世話方さんなど観音様を守っている世代が65歳以上と高齢化してきており、若い世代の人は就職するために都市に出て行ってしまうため、担い手がいなくなってしまう可能性があります。また働いている人は、平日の世話方業務ができません。担い手不足も深刻な課題です。

文化財の活用について

文化財を保存するために、私達は文化財の存在、魅力を知ってもらうこと、活用して資金を得ることが大事であり、スタディツアーなどを利用し、拝観者の増加を目指すことが良いのではないかと考えています。しかし、収容人数的に団体客が入れないところや地域内での価値観の違いがあり、観音様は自分たちだけの宝物で公開したくないという方がおられ、博物館や美術館の展示会に出展するにも地域の承認が必要な可能性がある。世話方さんの人数も少ないため、拝観案内が大変であり、またその案内のための知識を得るためにも数年連続して世話方をする必要がうまれ、担い手不足の地域に負担を強いてしまう。コロナにより拝観者数が減少し、ツアーやイベントなどが中止になり、維持管理費の確保が難しい状況です。コロナウイルスの感染が落ち着けば、遠方からの拝観者数も徐々に増加傾向になってくるのではないかと考えます。

黒田観音寺にて

ポスター②

龍大生の大津祭実習日記

チームの概要

龍谷大学社会学部のカリキュラムである社会共生実習高田プロジェクトで「文化財から“マネー”を創出する」というテーマで活動を行っています。文化財というのは「保存」と「活用」の二つのバランスを保つことで価値を見出していますが、本プロジェクトでは、その両方を専門家の方からの御講話やフィールドワークを参考に、いかに両立させるか、そしてそこからマネーを創出する新しい方法を考えています。

そんな高田プロジェクトの中でも、近江の祭りチームでは、特に大津祭を筆頭とする大津市内の文化財において、人々との関わりから発見した課題に参画することを目的とした活動を行っています。

大津祭とは

大津祭は、本市の中央部に位置する京町三丁目の天孫（四宮）神社の祭礼です。起源は、江戸時代のはじめにあたる慶長～元和年間（1598～1624）で、塩売り治兵衛による狸面踊りが行われ、老齢になってから体の代わりとして“からくりを載せた曳山”を用いるようになったのが元と考えられています。

本チームの活動においては、実際に用いられる曳山の曳き手に参加するなどの参画も行いました。

曳き手参加の様子

アンケート調査の実施

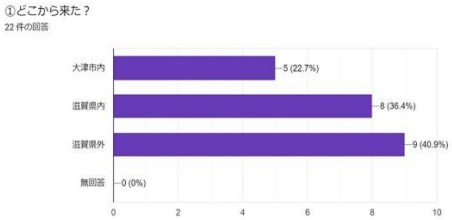
今回の調査は、「大津祭に対する印象・参加理由・参画経験を知る」という目的で、アンケート調査を行いました。アンケートは、10月8日の宵宮と、9日の本祭で実施しました。調査回答者の総数は２２名、性別は男女ほぼ半数ずつでした。

今回のアンケート調査では、参加されているかたがどのようなグループで、どこから来られているかに着目して調査を行いました。

調査の結果から、大津祭は２人組で参加されてる方が４割、３人、４で来られている方が２という結果が得られました。

次に、参加されている方がどこから来られているかに着目したところ、滋賀県内が約６割、県外が約４割となっていました。

上記の結果から、以前大津に居住していた方が、家族で大津祭に参加するために大津に来ている可能性があると考えられます。我々の予想よりも県外からの参加者が多いことが今回の調査の特徴でした。



大津祭から得た知見

大津祭における参加者の特徴として、大津市以外からの方々が非常に多く、県外からお越しになった方の多くが、「昔、大津に居住していたから」「久しぶりに参加したいから」との声が寄せられました。ここからわかることとして、現在の居住地とは異なる地域に住んでいる方々にとっても、大津祭というのは参加したくなるほどに愛着を強く持たれているという印象を受けました。

また、大津祭におけるボランティア参加については、アンケート調査においては一人のみ参加経験があると答え、可能であることは知っているものの、具体的にどういった制度がとられているのか把握している方は少ないことがわかりました。

今後の課題としては、こうした大津祭のボランティア参加の方法の周知も挙げられるのではと考えています。

宵宮演奏体験の様子

ポスター③

龍大生の八幡堀実習日記

チームの概要

社会共生実習高田プロジェクト「文化財から“マネー”を創出する」は、疏水船と大津という大枠のテーマを根幹として近江の祭り、近江八幡、観音ガールの3チームに分かれて活動しています。

そのうちの一つである近江八幡チームは滋賀県近江八幡市をフィールドとして、国の伝統的建造物群保存地区に選定されている八幡堀からその周辺地域の住民との関わりなどを通して学びを得ることを目的としています。主に八幡堀まつりに焦点を当てて活動し、会議やワークショップ等準備の段階から参画する形をとって内側に入ることで、外側の人間として地域の祭りを観察するよりも更に深く地域住民と祭りや文化財の関係やマネーの生み出し方を学んでいます。

近江八幡と八幡堀

近江八幡市は滋賀県のほぼ中央に位置します。ヴォーリズ建築や水郷などの風情溢れる景色と文化財が点在し、近江商人によって大きく栄えました。八幡堀は安土・桃山時代に豊臣秀次の八幡山城居城の時代から水運の拠点として用いられ、近江商人の発展とまちの繁栄に貢献したとして親しまれています。

戦後、八幡堀は利用頻度の減少や水質汚染から埋め立てる方策が出されました。しかし、地域住民の保存運動や清掃活動から中止となりました。これらの活動は観光促進ではなく、歴史の継承が掲げられました。

▲ライトアップされた八幡堀の様子

八幡堀まつりへの参画

八幡堀まつりの運営に関する会議である「近江八幡観光物産委員会」に出席し、事前打ち合わせなどを重ねることで運営や企画段階から参画していきました。具体的には、

①まつり当日にInstagramを用いて実施された　フォトコンテストの企画・入賞写真の選定

②まつり１日目に「夜遊びツアー」という、八幡堀まつりを訪れた一般客を対象とした　つまみ食いツアーの企画・実施

③その他、まつりで使用する竹やぐらの設置やアンケートの実施、まつり実施後に行われた近江八幡観光物産協会による反省会への　の参加

以上の３点を中心に行いました。

▲夜遊びツアーの様子

▲八幡堀まつり当日昼の様子

参画のスケジュール

※6月9日～10月19日：事前打ち合わせ8回
7月5日：現地で事前学習
8月20日：ワークショップ（竹ボール作成）
8月26日/29日/31日：MT（ツアー内容検討）
9月12日：MT（ツアー内容検討）
10月22日：八幡堀まつり1日目
10月23日：八幡堀まつり2日目
10月29日：竹やぐらの解体
11月25日：観光物産協会での反省会

活動で得られた知見

八幡堀まつりやヴォーリズ建築などの文化財は古くから親しまれ、地域に根差した存在となっています。地域住民はそれらへの関心が深く積極的な保存・活用の姿勢が見られます。一方で観光物産協会は人手が足りず、大学生のマンパワーがあって2022年度の八幡堀まつりが成功したという側面があります。観光物産協会に限らず、委員会等に参加した際の損得の均衡関係で脱退する人も多く、認知度が低い団体や高齢化が顕著な地域は担い手不足が発生してしまいます。そのため、地域の中での小規模な開催から今より大規模な開催になると、現在のボランティアや観光物産協会に加入している住民だけで負担することが不可能でしょう。今後、まつりの規模を大きくしていくためには、市の職員など安定した参画者が必要になってくると考えられます。

▲灯篭の設置・回収・点灯すべて手作業

農福連携で地域をつなぐ

ー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本清彦

（1）取り組みの趣旨・目的

障がい者の雇用機会拡大と農業の担い手確保を主な目的として徐々に普及してきた農福連携事業は、近年、農福連携が障がい者だけでなく高齢者やひきこもり者も含めた多様な人と地域をつなげる契機としても注目されています。本プロジェクトは、滋賀県栗東市で農福連携を通じて地域社会をつなげてきた障がい者支援組織「おもや」で、障がい者やスタッフとの農作業やファーマーズマーケットへの出店など、農業と福祉が交差する多様な活動に参画して、農業や福祉の課題を学んだり、多様な人々がどう働き、生き、つながりをつくっていけるのか考え、実践することを目指します。また関係者へのインタビューや参与観察といった社会調査や、イベントの企画準備運営などプロジェクトマネージメント的な実践経験を通じ、受講生が座学と現場を往還しながら複層的に学ぶ実習活動を仕組んでいます。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

まず、本実習で農福連携を初めて知ったという受講生の実習へのスムーズな導入を図りました。当初は受講生に文献や動画から農福連携について基本的な知識を学んでもらいながら、5 月以降は毎週金曜日の午前中におもやでの活動を本格的に開始しました。2 年目となる本プロジェクトのことはおもやの方々にはすでに認知されていました が、新規受講生とおもやのメンバー（利用者）やスタッフとの信頼関係構築が改めて必要であり、一緒に様々な作業を経験してもらいました。前期、後期を通じて、畑の土起こし、マルチシートや作物残渣の片付け、種まきから収穫まで種々の圃場作業や、野菜の調整や袋詰めといった出荷準備作業を、受講生がおもやの方々と一緒に行い、作業の説明やたわいもない会話も含めたコミュニケーションを通じて関係性構築を図りました。

▲ひたすらタマネギの苗を数え束ねる作業
―農業では淡々とした作業も多い

▲いちじくの枝の誘引作業―ヒモを結ぶのに
ちょっとしたコツと慣れが必要

受講生は、淡々とした作業を含めたこれらの経験を通じて、農業の面白さや難しさを学んだようです。農作業は時に重労働だったり、同じことが繰り返される退屈なものだったりしますが、ちょっとしたコツや習熟で作業を効率化できるといった気づきを得た受講生もいました。また普段は座学中心の授業が多い中、身体を動かす農作業が良い気分転換になるという声もありました。

作業参加に加えて、農福連携事業の現実やおもやの方々の思いをより深く学ぶため、社会調査手法のトレーニングを兼ねて参与観察やインタビューも行いました。参与観察は、受講生に記憶やメモをもとに作業の模様などを詳細に文字化したフィールドノーツを作成してもらうものでした。またおもやのスタッフ 4 名と利用者 1 名にインタビューし、それぞれの経歴や、農福連携事業の現状、課題とそれに対する思いなどを聞き取りました。一部のインタビューでは、録音からの文字起こしもやってもらいました。受講生は、普段の農作業では話題に上がらない福祉の課題を当事者からリアリティをもって学びました。

前期・後期を通じて行ったこれらの農作業や調査実践に加えて、おもや以外の地域の方々とつながる機会も設けました。農業や食を身近に体験し、地域の方々におもやや本プロジェクトについて知ってもらうことを目的に、6 月 26 日（日）にくさつファーマーズマーケットでワークショップを出店しました。ここでは、受講生のサポートの下、子どもから大人までたくさんの方々に紙製の米袋を使ったトートバッグを作成する体験をしてもらいました。受講生は事前にトートバッグの作成方法を調べ、たくさんの米袋をカット、整形、糊付けして、参加者が手軽にバッグを作れるよう材料を準備しました。優れた絵心をもつおもやの障がいを持つメンバーさんにトートバッグの見本品のイラストを描いてもらうなど、おもやの方々と協力しながらの準備でした。

▲ファーマーズマーケットに出店する
ワークショップ用の米袋トートバッグの試作

▲くさつファーマーズマーケットでの米袋トートバッグ
作成ワークショップ

普段のおもやの圃場とは異なる場所でも農作業を体験しました。残暑の９月には湖南市石部にあるおもやの新しい圃場に赴き、受講生が黒豆（黒大豆）を播種しました。移動にはおもやスタッフの運転をお願いせざるを得ず訪問回数は限られましたが、最後には石部圃場に赴き黒豆を収穫しました。収穫した黒豆を受講生が自ら炒って黒豆茶として、農福連携の理解を広めるため社会共生実習の全体報告会で参加者に提供し、「香ばしくておいしい」と好評を得ました。

▲石部圃場での黒豆の播種―基本的に腰をかがめた
手作業なのでしんどい

▲黒豆茶の試作―洗って炒るだけの手軽な作業で
薫り高いお茶ができる

（３）2022 年度の取り組みの成果と課題

おもやの方々の実習活動の認知や受講生との信頼関係が引き続き構築できたことは、来年度以降も本プロジェクトを継続していくうえで重要な成果です。受講生が自覚する学び

のポイントとしては、主に農業や福祉領域の様々な課題についての理解、ほとんど経験のなかった障がいを持つ人たちと「普通に」コミュニケーションがとれた経験、ワークショップや黒豆茶提供を含めた実習報告の経験を通じた企画力、計画力、実行力、ICT 利用を含めたコミュニケーション能力の向上などがあげられます。

他方、今年度の実習を通じて把握された課題がいくつかあります。1 点目は、移動手段の確保です。おもやの活動が本拠地の圃場と作業場だけでなく中山間地を含む別の地域にも展開し効果的な学びの機会があるものの、コロナ禍での車の乗車人数制限など移動手段の制限により、それを活かしきれませんでした。関連して担当教員の不手際もあって、ファーマーズマーケットなど地域イベントへの参加が限られたこともありました。

2 点目は、座学的な学びと現場活動との関連付けが不十分なことです。農福連携や社会調査手法に関する文献資料は数多く存在しますが、現場活動での学びを深めるには、それらを幅広く読み、理解しておく必要があると考えられます。

3 点目は、実習活動の安全性確保です。農業の特性上、夏期の暑熱下で屋外作業する場合もあり、作業を差配するおもやスタッフさんも十分に配慮してくれましたが、そうした作業に不慣れな受講生の熱中症回避にはさらに丁寧な注意が必要です。この他にも身体活動、屋外作業も多い実習であるので、様々な局面での配慮が不可欠です。

これらの課題はあるものの、上述のように受入先おもやの活動が地域内外で拡大、展開し始めており、楽しみながら学びの機会を活かせるよう実習を仕組んでいきたいと考えています。

報告会プレゼンテーション資料

社会共生実習
農福連携プロジェクト

教員　　坂本 清彦
チームメンバー　村上 祐紀・舟越 蹟・岩本 優・法戸 貴義・池野 史哉・西川 凛・大西 浩生・堀田 和真

1. 農服連携とは何か？

・農福連携

『障がい者の方に農業に参加してもらうことで社会への参加を促進する取り組み』

→　農業の高齢化による人手不足の解消　（農業面）
→　障がいを持つ方の働く場所を増やす　（福祉面）

⇨　**地域の多様な関係者とつながり生き生きと暮らせる共生社会の実現を目指す**

2.　実習の全体目標

・1年目の学生

縁活おもやの農作業や地域イベントに参画し、受入れ先の状況把握や関係者との信頼構築を図る。

農福連携事業の概要、課題把握と解決に向けた提言策定を図る。

社会調査のスキルアップ。

・2年目の学生

後輩受講生の学修支援をしつつ、前年度までの経験をふまえて農福連携事業における課題解決に向けた活動の提案、実践を行う。

3. 実習の受け入れ先について

・ NPO縁活　「 おもや」

障がい者、高齢者、生活困窮者らが農業に携わる

「農福連携」を実践している。自然栽培で野菜を育てている。

滋賀県栗東市成谷に新しい施設を設立しようとしている。

☆ **おもやでは、農福連携を通じて特に地域の方々との繋がりを築くことを大事にしている**

4.　実際の活動の様子

・前期

ファーマーズマーケット

石部での黒豆蒔き　等…

・後期

土を掘り返す作業

黒豆の収穫・選別　等…

黒豆茶

後ほど…

①収穫

②焙煎

③完成

5. 学んだこと・振り返り

・一回目の学生

障がい者だけでなく、事業所の方々や同じ実習メンバーと同じ農作業を行いながらコミュニケーションを取ることで面白さや新たな発見を得られることができた。

農作業だけでなく実際に障がい者の方と事業所の方と会話をすることができ、お互いの大変なところや好きなところ、これからのことを聞くことができ、知識を広げることができる。

・二回目の学生

社会にある既存の枠に当てはまることが難しい人でも、自分の得意なことや楽しいことを通じて地域社会につながっていくことができる。

6.　まとめ

・活動について

体全体を使って行う作業から、単純で簡単な作業も経験できる

「おもや」の方がリードして教えてくださるので安心！

・感想

農福連携というものを実際に経験し、堅苦しいイメージが改善された

実際に障がい者の方と直接関わることで障がい者の方の目線の話を聞くことができた。

ポスター

社会共生実習　農福連携プロジェクト
～農業と福祉を通じて広がる地域の輪～

誰もが生き生きとできる社会の実現のため、農福連携を実施している『NPO法人 縁活 おもや』にて調査を行った。その結果、農作物を無農薬で育てることの難しさやおもやで働いている方自身が楽しんで働いていることの重要性を学んだ。そして、障がいをその人の構成要素の一つとして捉える考え方を知った。

1. 農福連携とは何か？

〇「障がいを持つ方達に農業へ参加してもらうことによって社会参加を促進する取り組み」

・農業と福祉が持つ課題の解決にも繋がる

農業面の課題：農業従事者の大幅な減少
…高齢化、過重労働が原因

福祉面の課題：障がい者の就労の問題
…障がい者の増加、就労場所の不足が原因

↓

お互いの課題を補い合える

施設の説明を受けています。
イチジクのハウスを見学！

2. 実習の全体目標

・1年目の学生

縁活おもやの農作業や地域イベントに参画し、受入れ先の状況把握や関係者との信頼構築を図る。
農福連携事業の概要、課題把握と解決に向けた提言策定を図る。
社会調査のスキルアップ。

・2年目の学生

後輩受講生の学修支援をしつつ、前年度までの経験をふまえて農福連携事業における課題解決に向けた活動の提案、実践を行う。

3. 実習の受け入れ先について

・NPO縁活 おもや

障がい者、高齢者、生活困窮者らが農業に携わる「農福連携」を実践している。
自然栽培で野菜を育てている。
自分たちが育てた野菜を使った料理を提供している。
滋賀県栗東市成谷に新しい施設を設立しようとしている。

☆ おもやでは、農福連携を通じて特に地域の方々との繋がりを築くことを大事にしている

オモヤキッチンの
おすすめ料理

4. 一年間の主な活動

前期

黒豆を全員で植えました！

米袋トートバッグのワークショップ
大人も子どもも楽しみました！

タマネギの出荷作業
をしました！

後期

畑を作る作業
シャベルを使って土を
掘りました！

黒豆の収穫作業
おもやの方とも協力し
て頑張りました！

黒豆を枝から取る作業
おもやの方達と協力してたく
さん黒豆を取りました！

黒豆茶の試作
美味しかったです！

黒豆茶の元になる炒った黒豆
香ばし香りが漂います！

黒豆茶の試作品
黒豆の成分が出るのを待っ
ています！

5. 学んだこと

・自分も連携のサイクルの一部として活動することで新たな発見ができた

・障がい者の方を「こういう人たちだから」ではなく「この人だから」という考え

・作業をやる上でのコミュニケーションの大切さ・多様さ

教員	坂本先生
チームメンバー	村上・舟越・岩本・法戸・池野・西川・大西・堀居

お寺の可能性を引き出そう！

―社会におけるお寺の役割を考える―

担当教員：猪瀬優理・古荘匡義

（１）取り組みの趣旨・目的

本実習の目的はお寺の新しい可能性を、お寺の人たちや地域の方と作り出すことである。意外と身近な存在であるお寺をどのように活用していけば、地域の人たちの心の拠り所になるのかを考えていくことに取り組んだ。

（２）2022 年度の取り組みの紹介

【前期の取り組み紹介】

① 教員企画による外部講師講演

〇5 月 13 日 弘中貴之先生　子ども若者ご縁づくり推進室長　ご講演

弘中先生からお話を伺ったことで、お寺に様々な可能性を感じた。お寺は、ただ仏教の信仰に関わるものだけでなく、「テンプル食堂よしざき」のように、地域の食堂として人々を繋ぐ場にもなりうるということが分かった。お寺といえばどうしても仏教という印象が先行してしまいがちだが、食堂として地域の人々のご縁づくりを補助したり、災害時にボランティアを行ったりと、人々のために幅広く活動しているということを知り、今後様々な場面で AI 化が進んでいくからこそ、AI だけでは果たせないような人々を繋ぐ役割を、お寺が果たしてくれるようになると思った。

② 教員企画による現地実習フィールドワーク

〇5 月 15 日　浄念寺　日曜学校

前期の浄念寺で行われている日曜学校は、お寺で行われているものとは思えないほど自由なものだった。日曜学校の前半では、簡単なお経を読む時間があった。この後に藤井住職から法話のようなお話があった。当日参加する前は、いつもの日曜学校では遊ばないけれども、この日は特別に大学生が来ているので、一緒に遊ぶというスケジュールになっていると思い込んでいた。しかし、藤井住職の話では、毎回同じように遊んでいるというので驚いた。子どもたちと遊び終わった後で、お話を聞かせていただいたときにその理由が理解できた。藤井住職は仏教の教えを学ぶのではなく、仏教に触れることが大事だとおっしゃった。仏教に触れる機会が少ない今の時代では、仏教の教えを直接的に教典から学ばせることから始めるのではなく、たんに仏教があなたの身近なところにあるということを日曜学校に来ている子どもたちに教えているのではないかと想像できた。

○5 月 21 日 龍谷山本願寺（西本願寺）宗祖降誕会

西本願寺の訪問では、宗祖降誕会にお参りさせていただいた上、本願寺さんの唐門や書院、能舞台等を見学し、西本願寺にある貴重な文化財等について知ることができた。国宝である西本願寺の唐門をはじめとして西本願寺に存在する様々な文化財等はどれも美しく、大変素晴らしいものであり、長い歴史とその美しさとそれを維持するために様々な方が関わって日々努力をしていることを知ることができた。

西本願寺の訪問を通して西本願寺には長い歴史を持つ様々な文化財が現代においてもその美しさを保っている事を知り、長い歴史の中で多くの人々が次の時代においても西本願寺を維持しよう努めてきたことを感じ取ることができた。多くの人々が長い歴史の中で関わってきた背景には地域の人々にとって西本願寺は大切な存在であり、地域の人々に常に寄り添ってきたことがあるのではないかと今回の訪問を通して思った。

○5 月 21 日 一念寺訪問とまちあるき

1. 日時　　2022 年 5 月 21 日（土）13 時～15 時
2. 場所　　一念寺
3. 講師　　谷治暁雲住職
4. 実習内容　　主な実習は以下のとおり。

(1)　　ご住職の活動等についてのお話

(2)　　門前町の紹介

(1)の様子

(2)の様子

5. 所感

地域の特徴として高齢者が多いことから福祉講座や落語会等のイベントが行われ、また付近に本願寺があることから歴史的な面白い話が多く語り継がれ残っているため、門前町歴史ツアーのような歴史好きの人を対象にしたイベントなど幅広い活動が行われている。このような幅広い活動を行うにあたって宗派や檀家の許可に縛られることのない自由な取り組みができることが他のお寺と違う一念寺の特徴だと思った。

○6 月 26 日 覚明寺 みんなの笑顔食堂

夏に入る一歩手前の 6 月 26 日にフィールドワークとして覚明寺というお寺に行った。滋賀県の守山市の中心部から離れ、大きく、真新しい立命館の中・高等学校からさらに南西に下り、それが遠くに見える「大林」という集落の真ん中にあるお寺である。周囲にある数十軒程度の民家が並ぶ県道から、別の脇道に入ると一面が田植えを終えた田んぼに囲まれている事を確認できる、そんな場所だった。その光景は田舎で生まれ育った私にとっても懐かしい風景で、そこにどっしりと構える覚明寺という「空間」は幾年もこうして、地域の人々や都会の暮らしに慣らすようにすごしている私達を、ほっと一息つきたくなるような気持ちにしたに違いない。

実際に覚明寺の由緒は飛鳥時代まで遡り、近江源氏の佐々木氏や比叡山延暦寺と縁もあるという。そんな覚明寺の活動は「子ども食堂」であった。土地柄から勝手なイメージとして、そこまで多くの人数の参加者は集まらないのではないかと考えていたが、その想像を遥かに上回るほど賑やかな催しとなった。覚えている限りでも、子どもは 15 人程度でその親御さんも同行し境内には 30 人近くが集まっていた。

「これは大変だぞ」。普段から子ども会の手伝いをしている私は、遊び、学ぶよりも「遊ばれること」を想定したが、勤行からはじまり、絵しりとりなどのレクを進行すると全員が楽しんでそして笑顔で進行することができた。驚いたのは「勤行」の時間は皆静かに座って聴聞していたことである。文化的に成熟したお寺という空間がだからこそ生み出す、「空気感」によるものを感じざるを得なかった。また、親御さん方はみんな日常の世間話に花を咲かせており、お寺が地域にとって公民館のような存在であり、コミュニケーションの拠点のような「場所」であると感じた。そしてそれは子どもを地域の宝として認知しているように感じ、そのような「場所」をつくれていることにとても感動した。

③学生企画による講演・フィールドワーク

○ 7 月 8 日　外部講師招聘講演企画：中平了悟先生　西正寺住職

学生の企画で外部から講師の方を呼んで講演していただくことになり、まずは学生の中でお話を伺いたいご住職を挙げた。そのなかで多数決を取り決まったのが、西正寺でカリー寺などのイベントを行っている中平先生である。担当学生が中平先生にご連絡を取り、日程の調整を行ったりお話いただきたいことをお伝えしたりした。

当日は、現代社会においてお寺が地域の中でどのような役割を担うべきなのかについての中平先生のお考えや、イベントの運営について貴重なお話を聞かせていただき、学生たちにとって後期の活動の方向性を考えるためのきっかけとなった。

○ 7 月 17 日 フィールドワーク実施企画：西方寺

学生の企画でフィールドワークを実施することになり、学生同士で決めた「世代間交流の場をつくっているお寺」というテーマに沿ってお寺を探し、最終的に西方寺は草津市にあるというアクセスの良さがあり、広大な敷地で行われる様々な世代と「つながり」を持てるイベントが開催されている西方寺に決まった。

当日は、副住職の牧夫妻からマルシェなどのイベントの実施、各種教室のためのスペース提供、ストリートピアノの設置、動物と触れ合える場所の創設、お墓の新しい参拝形式の提供など、お寺を利用する人にとって様々なことができる場所としているお話を伺った。小さい子どもから大人まで「楽しい場所」として訪れることのできるお寺を知ることができとても感動した。

活動やイベントはもちろんだが、檀家さんとの関係に関する話からは多くの発見があり印象に残った。檀家さんたちに「仕方なく」ではなく「積極的に」イベントに参加してもらえる工夫をされているなど、様々な発見がありとても驚いた。

【後期の取り組み紹介】

後期は3つのグループに分かれ、各グループが選んだ実習先寺院で活動を行った。

① 西方寺グループ

前期に引き続き、後期も滋賀県草津市にある西方寺にお邪魔させてもらった。後期では西方寺主催で行われるイベントに学生も参加し、さらに持ち込み企画として「スタンプラリー」を実施させていただいた。

この企画は、西方寺のことを地域の方にもっと知ってもらう、お寺と地域の関係性を広げることを目的として取り組んだ。当日までに、西方寺の方と学生がやりとりをこまめにし、よりいいイベントなるように意見をお互い言いながらイベントに向けて取り組んだ。

当日は学生が想像していたよりも多くの参加者が訪れ、スタンプラリーも多くの子どもたちに喜んでもらえた。

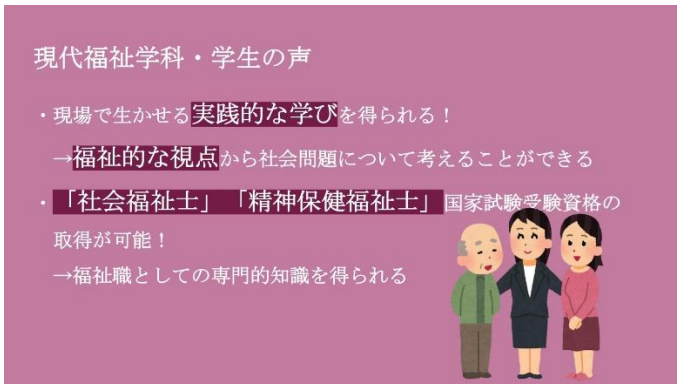
今回のこの活動を通して、目的である「西方寺のことをもっと知ってもらう、地域の方との関係性を深める」というものが達成できたように感じている。今回の活動だけで終わらず、今後とも西方寺さんと龍大生が繋がりたいと思っている。お寺と地域という関係性を身近に体験させてくださった西方寺さんにはとても感謝の気持ちでいっぱいだ。

② 一念寺グループ

広告ポスター画像表

広告ポスター画像裏

当日資料画像　1



当日資料画像　2

学生ならではの企画をおこないたい、若者とお寺の接点を作りたいという考えのもと、学生同士で話し合いをおこなう。その中で、龍谷大学が仏教系の大学であり、お寺との相性が良いのではないか、高校生にとって進学に関するイベントは関心が高いのではないかと考え、一念寺のご住職・谷治氏に「お寺でオーキャン」を提案することになった。

ご住職との打ち合わせの中で、当日高校生に向けてどんなことを伝えるかについて、日程について、必要な準備についてなど話し合った。担当学生はふたりだったため、主に広報と当日のスライド作成の担当に分かれて、それぞれ準備をおこなった。

広報担当は、広報に用いるポスターの作成や、大学の社会共生実習支援室や高大連携担当の方に協力していただきながら、高校への連絡・交渉をおこなった。

当日のスライド作成担当は、学部の魅力を伝えられるように学生に話を聴いた内容を生かしてスライドを作成した。

結果は、締め切りまでに応募がなく、残念ながら中止となった。企画の反省点を学生間で洗い出した。

③　覚明寺グループ

地域とお寺との関係について調査したいと考え、その中で地域の子供たちがお寺に集い、様々な活動を行った後に食事する覚明寺の「みんなの笑顔食堂」という活動に参加している子どもたちの保護者と、西方寺の「大根炊き供養」の参加者に対してアンケート調査を行うこととなった。

このアンケート調査では覚明寺の「みんなの笑顔食堂」の参加者の保護者と西方寺の「大根炊き供養」の参加者にお寺との関係や移住の有無等について調べることができた。元々お寺と関係を持っていなかった人が多かったため地域とお寺の関係を考える上では非常に重要な情報であると思った。

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

【後期の各班の取り組みの成果】

① 西方寺グループ

私達は西方寺という寺院で、イベントを行う際に最初はベビーカステラをはじめとした出店を出すことを考えていた。しかしながら、西方寺副住職の牧さん夫妻と話すうちに、出店のような商売に主眼をおいた社会人的な視点ではなく、もっと根本的な、お寺という空間が持つ様々な行為を基に繋がりが生じる交流の場所という点を自分たち学生自身が自覚できることが必要ではないかと感じるようになった。

そこで自分達のグループでは、お金がかけられなくても、主催者側と参加者側の両方の立場にとってお寺が「人々の輪」をつくる場所になれる企画を考えることとなった。商品ではなく「企画」という視点にたてたことは、お寺という場所の未来を考えていくうえでの大切な機会になったと思う。

② 一念寺グループ

本企画では参加者は集まらなかったが、企画準備の段階で企画実施が可能なのか大学への確認、企画広告の作成、広告掲示協力を高校へ依頼などで礼儀や手続きの難しさを学ぶことができた。また本実習の課題である「現代におけるお寺の役割」について、お寺は「宗派などに捕らわれない誰もが利用できる、人々にとって身近な交流の場所」であることを実感することができた。

今後の課題としては、今回は企画担当者の考え方が高校生と近いものとして企画を立案したが、次回行う場合はターゲット層のニーズについて調査し、それを大学生らしい視点で分析したうえで高い企画を立案する必要があると考える。また、企画担当者が二人で少人数だったので作業の進捗度が遅くなっていたので、企画の内容を人員に見合ったものにするか、もっと他に頼れる人材を探すべきだと思った。

③ 覚明寺グループ

成果として、覚明寺で行ったアンケートについて、まず参加していた親御さんの半数以上が移住してきた方たちだということが分かった。しかし、笑顔食堂に参加しようと思った理由については、「子どもが違う地域の保育園に行っており、同じ学区の方と知り合いになれたら、と思い」という回答が一つあるのみで、ほかはママ友に誘われてといった回答で占められていた。つまり、お寺と関係を持つ以前から顔見知り同士だった親御さんがほとんどと考えられる。

もう一つの成果として、「初めて笑顔食堂に参加する前と後のイメージ」を聞いた結果があげられる。「笑顔食堂に参加する前のイメージ」に共通しているのは「単に遊ぶだけで帰るのでは」といった意見だった。「参加した後のイメージ」に共通しているのは、「様々な制作もすることができて充実していることに驚いている」という部分だった。

アンケートを実施する前は、上記にあげた以外にも、「お寺で何をするのだろうという疑問があった」という回答があるかと予想していたがなかった。これは笑顔食堂のことについて聞いたためそうなってしまった可能性もある。この笑顔食堂はコロナ前にも実施していた。そして今回の笑顔食堂に参加していた親御さん全員がコロナ前から覚明寺の周辺地域に移住していたということから、覚明寺でどのようなことが行われているか理解していたのではと考察できる。このようにお寺で行われていることが周囲の人々に知られていたので、笑顔食堂にも人が多数集まったのではないか。

西方寺で行ったアンケートからは、大根炊き供養に参加していた人たちの草津市における居住年数は5年から64年と、最近、転居してきた方も長く居住している人もいることが分かった。大根炊き供養に参加しようと思った理由については、「友人に誘われて」「ボーイスカウトに所属しているため」「お寺の役員の活動の一環として」といった回答があり、お寺の他の活動とのかかわりに関連して参加している人が分かった。西方寺のこれからのイベント、行事に期待することとしては、「継続してくれること」「地域の人が交流できるイベントがあること」といった回答があり、高齢者も若者の幅広い世代の人の交流の場となる期待が寄せられていることが分かった。口頭で檀家さんかどうかを質問したところ、檀家さんではない方も参加しており、お寺に来た理由を尋ねたところ、「いつもお世話になっているから」ということだった。

これらのことから、西方寺ではたくさんのイベントを開催していることがきっかけで檀家さんではないにもかかわらず、お寺の掃除（大根炊き供養の前に実施）に来るほど関係が深くなる人もいるということが分かった。

全体のまとめ

本実習では前期の訪問やインタビュー、後期での学生持ち込み企画を中心にお寺の新しい可能性を、お寺の人たちや地域の方と作り出すことを目的とした。結果的に「学生ならでは」の学生企画を提案できたと考える。地域にとってお寺の存在は地域の人との繋がりの場所であり、子どもたちにとっては第三の居場所のような存在だと考える。今後としてはお寺×学生のようにこれからも活動を継続していくことが大切だと考える。

報告会プレゼンテーション資料

お寺の可能性を引き出そう！
～お寺でご縁づくり～

…

はじめに

目的
お寺の新しい可能性を、地域や関係者の方と作り出す

活動内容

前期
お寺についての知識を得るために現地実習先を決定・実習（西本願寺・一念寺・浄念寺・覚明寺・西方寺・西正寺）

後期
前期に行った実習先で企画を持ち込んで活動

私たちが持ち込んだ企画

①西方寺　　マルシェでのスタンプラリー
②一念寺　　お寺でオープンキャンパス
③覚明寺・西方寺　　アンケート実施

前期　浄念寺

前期　西本願寺

前期　中平先生（西正寺住職）講義

西方寺祭（草津市）

【活動内容】
- イベント運営の補助、準備
- 自分たちで考えた企画（スタンプラリー、グチコレ）を実施した

【ねらい】
- 実際にお寺でのイベントに参加し、お寺と地域の関係を体感する
- お寺の新しい可能性を発見する

西方寺はどういう「場所」であるか

- イベントは、年代を超えて人と関わるきっかけになっていること、その場所が「お寺」ということを参加してみて目の当たりにした。
- その場で出会った子供たち同士が仲良くなっているところを見て、お寺が「人をつなぐ場所」になっていることを実感した。
- 学生の企画（スタンプラリー）を通して私達自身も子供たちと触れ合うことができ、お寺との新しいつながり（ご縁）を作ることができた。
- イベントなどをお寺で開催することによって地域の人たちが、お寺に自然と足を運ぶこと、居心地のよい場所になっていると感じた。

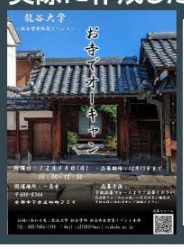
一念寺・お寺でオーキャン①

Q. 何故、お寺でオープンキャンパス？
・ターゲットとして **若者** を設定！
→ **若者とお寺の接点** を作る
・ **大学生ならでは** の企画を！
→年齢が近いからこその視点で企画

一念寺・お寺でオーキャン②

○大学と連携している高校へ **連絡・訪問** ！
・大学を通じて高校に連絡
→高大連携室、社会共生実習支援室のご協力のもと！
・実際に訪問して広報

実際に作成したポスター・資料



一念寺・お寺でオーキャン④

○開催状況

・締め切りまでに応募がなく、

中止 という結果に…

・問題点について、**振り返り** を行う

一念寺・お寺でオーキャン⑤

○反省点

・開催時期、広報、内容について…

○学んだ点

・手続きや交渉の難しさ

・企画の組み立て

覚明寺、西方寺におけるアンケート調査

●ねらい

○お寺と関わる前と後ではお寺に関するイメージはどのように変化したのか

●アンケート対象

○覚明寺 「みんなの笑顔食堂」に参加した保護者の方々

○西方寺 「大根焚き供養」に参加した西方寺の檀家の方々

アンケートから見えてくるもの

●イベントに参加している人は地域に長く住んでいる人もいれば移住してきた人など様々な人が参加していること

●一度参加してもらうことが重要

●お寺におけるイベントや行事では継続性と地域の人々との交流が重要

おわりに

●今お寺では仏教に関わりのない人も参画して地域の居場所やつながりをつくる活動が積極的に行われている。

●そのような活動に参加しながら、地域社会におけるお寺の役割と可能性を考える

●地域の人たちの心のよりどころ

●地域コミュニティの希薄化を解決する糸口が、お寺にあるかもしれない

●人と人との「縁」づくりをお寺で…

ポスター①

西方寺の活動について

小石原、中村、西岡、西畑、村上、望月

事前準備と計画

大きなテーマ
『西方寺だからこそ、学生だからこそできることはなにか？』

参加活動
- **11月12日（土）8:00～16:00『西方寺祭』**
- **マルシェ的な活動であり「音楽ライブ」「フリーマーケット」「キッチンカー」etc**

たくさんの人が集まって参加するので、アクティビティ的なことはできないだろうか

西方寺で「つながり」を深めることができた。と感じてもらう！

実施した企画

スタンプラリー

- 境内の「名所」にスタンプを置く
- 地域の子ども達が遊びながら西方寺の事を知ってもらう

グチコレ

- グチ×コレクションの略
- 普段いえない悩みや「グチ」を吐き出してもらう
- 非日常的な空間だからこそ、気軽な気持ちで自分の「グチ」と向き合える

まとめ

本活動を通じて、若者を含めた様々な世代が集まる西方寺という場所で、コミュニティづくりにおいて重要な主体性を持って地域の人と話すことができた。それによって学生という限られた予算の中であっても、自分達の行動で潜在的なニーズを発見するという能力を身につけることができた。

ポスター②

覚明寺・西方寺での活動について

覚明寺、西方寺におけるアンケート調査

- ねらい
  - お寺と関わる前と後ではお寺に関するイメージはどのように変化したのか
- アンケート対象
  - 覚明寺 「みんなの笑顔食堂」に参加した保護者の方々
  - 西方寺 「大根焚き供養」に参加した西方寺の檀家の方々

西方寺（草津市）

・草津市に何年住んでいますか

5年、6年、7年、16年、30年、64年

・なぜ大根炊き供養に参加しようと思いましたか

友人に誘われて、ボーイスカウトに所属しているため、お寺の役員のため、活動の一環として

・西方寺のこれからのイベント、行事に期待すること

継続してくれること、地域の人が交流できるイベントがあること、地域の人が気軽に集えるイベント、若者中心になりつつあるが、高齢者も集えるようにしてほしい

調査結果

覚明寺（守山市）

・守山市に何年住んでいますか

3年半、5年、6年、8年、31年

・移住した理由はなんですか

職場が近いから、子育てがしやすいから、結婚を機に移住、お互いの実家に近いから

・なぜ「みんなの笑顔食堂」に参加しようと思いましたか

友人が誘ってくれたから、子どもが行きたいと言ったから、知り合いを作りたいと思ったから

アンケートから見えてくるもの

・イベントに参加している人は地域に長く住んでいる人もいれば移住してきた人など様々な人が参加していること

・一度参加してもらうことが重要

・お寺におけるイベントや行事では継続性と地域の人々との交流が重要

・「みんなの笑顔食堂」に参加する前と後のイメージを教えてください。

遊ぶ場所の提供だけと思っていたが、制作の時間もあり、充実した時間を過ごせました。

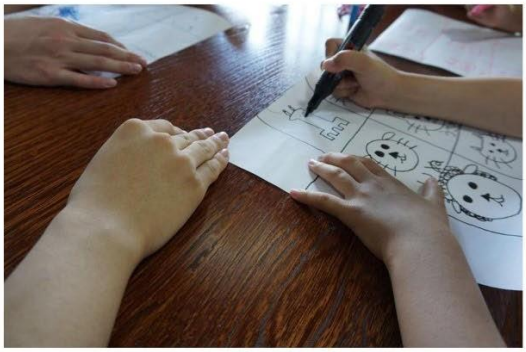
行く前はドキドキ、アットホームな雰囲気で楽しいです。

参加前は集まって食事をするだけと思っていましたが、楽しいイベントもあり、親子で楽しい時間を過ごすことができました。

参加する前はパンをもらって帰る程度に思っていましたが、内容も充実していて大満足でした。

・「みんなの笑顔食堂」に参加して距離感が変わった人はいますか。

同じ歳の子供を持つお母さんと話ができるようになりました。



ポスター③

一念寺での活動について

北川、下山

▌企画概要

・企画名：「お寺でオーキャン」
・会場：一念寺
・開催日：１２月１８日（日）　10：00～12：00
・参加形式：QRコードまたは電話、メール予約
・イベント内容：「講義体験」、「学部・実習紹介」、「グループワーク」
・企画広告ポスター・当日資料

▌企画目的

・お寺に馴染みのない若者がお寺について「知り、訪れる」、また参加者が「お寺の未来」について考えるきっかけをつくること。
・現代社会におけるお寺の役割は、宗派などに捕らわれない誰もが利用できる交流の場所であり、身近な存在であることを示す。

▌企画開催までの流れ

ターゲットを若者に設定
私たちが持つ知識や能力で企画に役立つのは「学生ならではの視点と考え方」であったため、ターゲットを若者に設定

→ **オープンキャンパスのようなイベントを提案**
高校生は進学関係のイベントに興味があるのではと考え、一念寺住職に提案

→ **お寺で実現が可能なことを確認**
ご住職と提案した企画内容を検討し、龍大非常勤講師でもあるご住職に体験講義を担当していただき、お寺の設備上も実現可能な企画であることが確認できたため、開催を決定した。

→ **広告・当日資料の作成**
広報と当日資料作成に分かれて作業。広報は広告ポスター作成、高校へ広告掲載を依頼するなどの作業。当日資料作成は当日の学部・実習紹介スライドを作成。

→ **大学・高校との連携**
龍谷大学高大連携室、社会共生実習室の協力のもと「龍谷大平安高校」「京都工学院高校」へ学生がアポイント・交渉を行い、広告掲載の承諾を得る。

→ **開催**
開催日の2日前を応募締め切り日としたが応募者がおらず開催を中止。集客の反省点や今回の取り組みでの学びについて各自整理し報告

▌まとめ

・何が悪かったのか？

- 高校生の興味を引くような内容ではなかったのか？
- 開催時期が悪かったのか？
- 広告が悪かったのか？

・今回の気づき

- 新しい取り組みには信頼と実績、既存のコミュニティの力が必要
- お寺での活動に偏見を持つ人もいる
- お寺は地域コミュニティの形成・維持をする場所

いくつになっても、出かけられる！

～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

担当教員：髙松智画

（1）取り組みの趣旨・目的

介護が必要な高齢者の生活問題に関する学習やプランニングの基礎的な学習をするとともに、高齢者へのインタビューから、どのようなツアー企画にするかを検討していく。そして、下見やプレゼンテーションでのフィードバックを重ねて、企画内容を練り上げていく。

このような活動を通じて、本プロジェクトは、どのような配慮や介助があれば、介護が必要な高齢者の「出かける」ことを保障できるのかを考えるとともに、「出かける」ことを妨げている問題・課題は何か検討すること、さらには、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目的として開講する。

これまで2年連続で新型コロナウイルス感染症拡大の影響でツアー実施を見送ったが、今年度は感染予防措置が緩和されてきたことから、プランが実施できる見通しとなった。

（2）2022年度の取り組みの紹介

① 高齢者の生活問題、ツアーの意義やプランニングの方法に関する学習

まず、高齢者への理解を深める学習、生きがいに関すること、外出に関する問題・課題、特に新型コロナウイルス感染拡大による外出機会の減少が生活にどのような影響を及ぼしているかについて学習した。

つぎに、「安全・安心かつ魅力ある観光を高齢者や障害者に提示し積極的に外出する意欲を持って頂くことで生活の質を向上させる」ことを目的とし、バリアフリー調査・評価、介護旅行の企画・運営等を行っている、「株式会社どこでも介護」の大西氏と橋本氏から、介護旅行の事例や参加者の声などをあげながら、高齢者にとって「出かける」ことの意義や、どのようなプランを作成すればよいかなどについて講義を受けた。

さらに、昨年度の実習で作成したツアー企画書、参加者募集のフライヤー、ツアー紹介動画の閲覧をしたうえで、受講生一人ひとりがどのようなツアーにしたいかについて話し合いを行った。また、旅行会社などが販売している高齢者向けツアーに関する情報収集も行った。

② 高齢者へのインタビュー

ツアーの対象となる高齢者とコミュニケーションが図れるようになること、普段の生活の中での困りごとや要望などを聞き取ることで、高齢者への理解を深めること、旅行や外出への要望について聞き取ることを目的として、京都市内の通所デイケア施設利用者と大津市内在住の 5 名の高齢者を対象にインタビューを行った。

その後、インタビュー内容を全員で共有し、ツアーコンセプト、対象、行先や内容について意見交換を行った。

▲インタビューの様子

▲プレゼンテーションの様子

③ ツアーの企画とプレゼンテーション

ここまでの学習と実習をふまえて、受講生それぞれのアイデアから 3 つにグループ分けを行った。そして、グループごとにツアープランのコンセプトを考え、下見を行い、ツアー企画書を作成して持ち寄り、プレゼンテーションを行った。

各グループが提案したプランは次の通りである。一つ目は、蹴上インクライン、南禅寺、大力邸、野村美術館をめぐる「食も！景色も！蹴上の名物よくばりツアー」、二つ目は、知恩院をめぐる「まったり東山ツアー ～京都の魅力を感じよう～」、三つ目は京都御所とその周辺をめぐる「歴史や景観を存分に楽しもう !! 人生は冒険や !! ～」である。

各プランのプレゼンテーションを行い、質疑応答や講師からのコメントを踏まえて、プランの練り直しと再プレゼンテーションを行ったのち話し合いを行い、実施するプランを決定した（企画書は以下のとおり）。

「まったり知恩院ツアー ～東山の魅力を感じよう～」企画書（概要）

◎ツアーコンセプト

①日本らしさや歴史を感じることができるお寺や景色

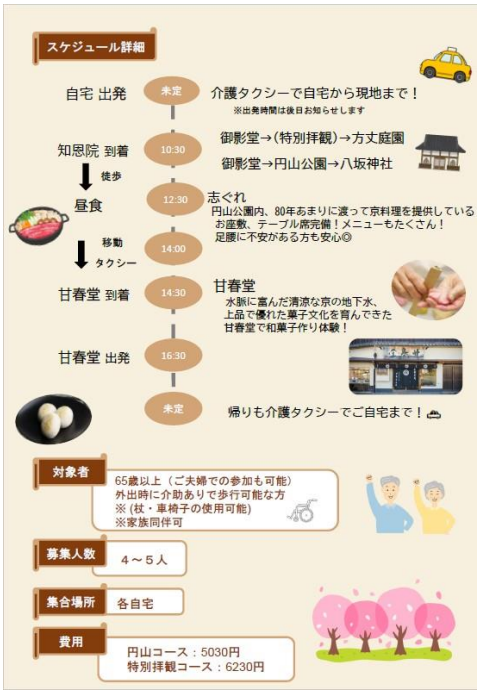
②京都や四季折々の食材を用いたご飯

③季節を感じることのできるスポット

＋point 時間に余裕を持ってゆったり観光

◎実施日時：2023 年 3 月 16 日（木）
◎タイムスケジュール
9：00　介護タクシーで自宅から現地まで送迎
9：30　知恩院到着
　　順路　三門→御影堂（10：20 から始まる法話を聞く）→泰平亭（お土産）→
　　11:00　特別拝観（大方丈・小方丈）→方丈庭園
12:15　介護タクシーで移動（約 15 分）
12:30　お昼　『志ぐれ』
14:00　介護タクシーで移動（約 15 分）
14:30　七条甘春堂 京都タワーサンド店到着
15:00　和菓子作り体験
16:30　介護タクシーで自宅まで送迎

▲知恩院ツアーのちらし（表面）



（裏面）

④ ツアー実施にむけた現在の活動
　２月中旬に連携先である通所デイケア施設で参加呼びかけの時間を設けてもらい、３回プレゼンテーションを行った結果、定員５名としていたところに７名の応募があった。
　そして、参加申し込み者には移動や食事、トイレの使用などにおいてどのような配慮や介助が必要であるかを詳しく知るために、個別の面談を行った。その内容に基づいてフェイスシートを作成して全員で情報共有を図り、参加者一人一人に適した介助ができるよう

確認をしていくことにしている。
　さらに、知恩院の参拝経路には段差や階段などがあって、日頃は自立して歩行できている人でも車いすを使用しなければならないことが想定されるので、そのための車いす操作の練習も直前に行うことにしている。
　安全に楽しんでもらうためには、どのような準備、実施体制、役割分担が必要かを詳細に詰めていき、ツアー当日が迎えられるよう準備を進めている。

（3）2022 年度現段階での取り組みの成果と課題
　プラン作成に先立って行った高齢者へのインタビューや学習をふまえながら、何度も企画書を修正した過程から、他者の意見を尊重しつつ自らの意見を主張すること、意見をまとめて形にしていくことについて、多くの学びを得たのではないかと考える。
　予定していた人数よりも多くの参加応募があったのは、知恩院参拝で特別拝観に興味を持ってもらえたこと、インタビューを通じて学生との交流がすでにあったことなどが影響していると考えらえる。
　また、「どこでも介護」大西氏、橋本氏からの指導や当日の支援に加えて、通所デイケア施設の運営母体である病院医師による事前の診察やツアー当日の緊急対応支援、通所デイケア施設からの参加者家族への説明、通所デイケア施設職員 2 名のツアー同行といった、ツアー実施のための体制を整えている。このことから、どんなトラブル・緊急事態が発生するかを想定し、それらを回避するにはどうすればよいかということを体験的に学ぶことができている。

報告会プレゼンテーション資料

プレゼンテーションの結果…

知恩院

〈理由〉
- 移動距離が短い
- 送迎付き（自宅から現地まで）
- 時間にゆとりのあるスケジュール

ツアー実施に向けて

☑日時　：2023年3月16日
☑対象者：川口内科医院に通われている方
　　歩行可能な方（杖の利用OK）

〈今後の活動内容〉
- 川口内科医院でのプレゼンテーション
- 新型コロナウイルスの感染対策
- 参加者がキャンセルした場合の対応
- 介護タクシーと車いすの予約

ツアーの課題・反省点

- 車椅子を利用している人が参加するのが難しい
- 観光客の人数を予想するのが難しい

ご静聴ありがとうございました。

ポスター

いくつになっても出かけられる！
～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

実習の目的

高齢者が抱える課題や日常生活での困りごとを考察しながら、
旅行としての楽しみと高齢者の方への配慮の二つを両立した、
高齢者の方に楽しんでいただけるツアーを考えること

1

高齢者への理解を深めるための講義

1.過去のツアーを知る

過去の宣伝用動画やポスターを閲覧

2.車いす講座

実際に車いすに乗り、車いすを押す側と押される側の体験をし車いす補助の大変さを学んだ

3．高齢者の特性について勉強

・筋力の低下による日常生活動作(階段を上がる等)
・疲労しやすいこと
・歩くスピード
などツアーを計画するうえで知っておくべき知識を学んだ

4．(株)どこでも介護の職員さんを招いての講義

障害を除いたツアーが介護ツアーではなく、障害をどのように乗り越えるか、どのようにサポートするかを考えることが大切

2

インタビュー

①日常生活について
・ちょっとした段差や階段がつらい
・感染症対策
・長距離の移動への不安がある

②食事
・基本的に何でも好き
・甘いもの（和菓子、洋菓子）
・お肉

③行ってみたい場所
・寺社仏閣
・季節、自然を感じられるところ
・普段いけないような場所

④どのようなツアーに魅力を感じるか
・人とコミュニケーションがとれるツアー
・自然を楽しめるツアー
・いろんな場所へ訪れることのできるツアー

１０/２５、１１/７に川口内科医院へ訪問

交流を深めるためのゲームをした後、お話を聞きました

１０/２８に地域の高齢者を瀬田キャンパスに招待

グループごとに5名の方にお話をお聞きしました

3 ツアー企画・検討

各グループ３回の下見を実施！

〖心がけたこと〗

・高齢者の方に**喜んでいただくこと**
　綺麗な自然の景色や美味しいお食事など

・**高齢者目線**での下見
　段差や砂利道、道の幅などの確認

・**動線の確保**
　家を出た瞬間からツアー中、帰宅までの道筋が安全であるか、また参加者に対して無理のないモノか

・**ゆったりとしたスケジュール**
　トイレや休憩など急な事態や、高齢者の移動時間を考えた、時間に余裕をもったスケジュール設定。

〖課題〗

・バリアフリーが少ない場所でも参加者が安全に参加できる方法を考えること

・トイレや休憩所の確保

・コロナなどの感染症対策

・車いすを利用される方への配慮

・なぜその場所をツアーに選んだのか目的をはっきりさせること

京都をまったり！蹴上名物ツアー

◎ツアーコンセプト
「食を楽しむ。季節を楽しむ」

◎工夫ポイント
①景色を楽しめるスポットを取り入れた
②ゆったりとしたスケジュール
③写真で思い出を残せるようなフォトスポット

京都御苑散策ツアー

◎ツアーコンセプト
「誰でも参加できる」

◎工夫ポイント
①高齢者の希望の景観を見られる
②高齢者の希望の食事ができる
③高齢者に寄り添った
　スケジュール・コースで楽しめる

まったり東山ツアー
～京都の魅力を感じよう～

◎ツアーコンセプト
①日本らしさや歴史を感じることができる
　お寺や景色
②京都や四季折々の食材を用いたご飯
③季節を感じることのできるスポット

◎工夫ポイント
時間に余裕を持ってゆったり観光

4 実施に向けて

◎今後の活動内容

川口内科医院でのプレゼンテーション
新型コロナウイルス感染対策
参加者がキャンセルした場合の対応
介護タクシーと車いすの予約

◎課題点

募集方法
開催日の曜日
出発時間を早めること
ツアーコンセプトを明確に
雨の日の対策
個人情報の取り扱い
観光客の人数を予想するのが難しい
車いすを利用している人が参加するのが難しい

3月中旬実施に向けて、改善を重ねていく

多文化共生のコミュニティ・デザイン

～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～

担当教員：川中大輔

（1）取り組みの趣旨・目的

グローバル化が進展する中，人々の国際的な移動は活発化している。COVID-19 パンデミックの影響を受ける前の動向として，国連経済社会局（DESA）『国際移民ストック 2019』を参照したい。同報告書によれば，2000 年に約 1 億 7300 万人であった国際移民人口は 2019 年に 2 億 7200 万人に達し，世界人口の 3.5%に至っている。日本も例外ではない。法務省出入国在留管理庁の統計によれば 2019 年の在留外国人数は 2,829,416 人であり，2012 年以降増加し続けている（2012 年の在留外国人数は 2,033,656 人）。日本も既に多くの外国人が定住し，多文化社会となっているのである。また，日本の植民地支配を背景に移住する／させられることとなった在日コリアンをはじめとするいわゆる「オールドカマー」も，1990 年の入管法改正以降に渡日した「ニューカマー」と呼ばれる人々も，移民世代を重ねて日本社会に定着していっている。

しかし，日本が定住外国人や移民背景の住民（以下，定住外国人等）にとって住みやすい社会なのかと言えば，そうではない。「言葉の壁・制度の壁・意識の壁」という 3 つの壁が立ちはだかって，生活のさまざまな場面で苦労を強いられることとなる。日常のコミュニケーションの中で攻撃的な差別に晒されることも見受けられている。日本には体系的／包括的な移民政策や多文化共生に関する基本法もなく，定住外国人等支援は自治体や地域住民の努力任せになっていると言っても過言ではない。こうした中で，定住外国人等の人々が直面している「生きづらさ」から発せられる声に学び，どのような社会変革を成し遂げていくべきかを見いだしていくことが必要とされている。果たして日本社会は「あってはならない違い」をどれほど解消できているのだろうか。「なくてはならない違い」をどれほど保障できているのだろうか。時代と共に変化する「あってはならない違い／なくてはならない違い」について，ホスト社会の人々の認識はアップデートされているのだろうか。「ちがいを越えた協働」をどれほど実現できているのだろうか。多文化共生という言葉は浸透し，社会的にも多くの人に支持されるものとなっているが，残念ながらその「実」が伴っていない。

そこで，本プロジェクトでは，「実」の部分で今どのような多文化共生の取組が求められているのか，その一端を明らかとすることを目的とする。具体的には京都の在日コリアンの方々との交わりを中心に，多文化共生を目指したまちづくりの課題を見いだす。そし

て，その課題達成のための活動を企画・実践していくこととなる。この過程を通じて，ダイバーシティの向上が，私たち一人ひとりの生を豊かにし，また，新たな社会をつくりだす力の増大につながる道筋を探究していきたいと考えている。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

2022 年度前期は日本の多文化化の現況や歴史的な経緯，他国との比較，重要概念についてグループで調べて，相互に発表しあうことから始めた。この事前学習の後，本プロジェクトの活動地域となる東九条（京都市南区）を訪れ，コミュニティパートナーである南珣賢氏（NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファ事務局長），前川修氏（希望の家児童館館長・地域福祉センター希望の家所長），小林栄一氏（NPO 法人東九条地域活性化センター代表理事）から各団体の活動／運動の展開について説明いただいた。

このフィールドワークを経て，受講生は自らの問題関心に即して活動先を選択し，チームを編成した。そして，現場での実習活動を通じて得られた情報を整理しながら，企画テーマの候補出しを進めていくこととなった。

夏季休暇期間にはNPO 法人IKUNO・多文化ふらっと（大阪市生野区）や認定 NPO 法人まなびと（神戸市中央区）を訪問した。まちづくりや子ども・若者支援の視点から，多文化共生を巡る現状課題への理解を深めるとともに，今後の活動への示唆を得ることとなった。前期授業で当事者との関わりにおいて試行錯誤していた受講生からは，後にこのフィールドワークで聞いたメッセージが突破口を得る機会となったとの発言がなされた。

後期授業はチームごとに受入先で，活動に従事しながら当事者や支援者，関係者の方々へのインタビューを行い，企画テーマを絞り込んでいった。

エルファでは利用者の方々とレクリエーションをするなど，一緒に過ごす中で日々の生活の中での課題を伺っていった。この中でキムチづくりのワークショップの実施が導き出されていった。キムチは細かい点でレシピや調理法が家庭ごとに異なり，親しみを感じられる味にも違いが出てくる。そのため，こだわりを持った利用者は施設で提供されるキムチを食さないといったことが起こってくる。そこで，キムチづくりにこだわりのある利用者の方々を講師として作り方を学ぶ場を設ける企画が提案された。この準備・実施の過程では，キムチにまつわるエピソードを入り口として，朝鮮半島での思い出や来日後の暮らしなど，生活史を聴かせていただくことにもなった。ここで聴き取った話は，オリジナルレシピと共にリーフレットに掲載し，エルファの方々や本学学生等に配付した。利用者の強みや思いが発揮される場づくりは当事者のエンパワメントの機会にもなることから，新たな実習活動の形が浮かび上がるきっかけとなった。

希望の家児童館・地域福祉センター希望の家では，（移民背景の人々との共生にとどまらない）「幅広い多文化共生」の考えに立脚しながら，多様に展開される諸活動に参加することとなった。その中で今年度の活動の柱として「買援隊」が設定された。希望の家近隣にはスーパーがなく，高齢者や障害者にとっては買い物支援活動のニーズがある。そこ

で移動販売車の誘致が地域の方々によってなされた。これが「買援隊」である。受講生は買援隊の活動のお手伝いをしながら，利用者の方々の生活課題や運営者の方々に運営課題を聴き取って，複数の企画案を提案した。その結果，利用者の増加を目指して，広報用の幟が制作されることとなった。幟のデザインにあたっては，希望の家の喫茶スペース「にこにこや」の利用者の方々の声も聴きながら，受講生が東九条で活動する中で抱いたイメージも合わせて表現された。今後，希望の家の方々の協力の下で買援隊の実施日前日から当日に架けて幟が立てられることとなった。

東九条地域活性化センターでは，同法人が運営するコミュニティカフェ「ほっこり」で展開されている「ほっこりランチ」や，海外にルーツのある子どもの放課後の居場所を提供する「子供クラブ」，京都府在住の定住外国人を対象とする「年末生活緊急支援活動」に参加した。土曜日のほっこりランチではフィリピン料理やインドネシア料理といった多文化メニューが提供されるが，これはスタッフの方々の出身地域と関係している。今年度受講生のひとりは中国からの留学生であることから，香港やマカオ，広東省の喫茶軽食店で定番メニューとされる「サイトーシー（香港風フレンチトースト）」をアレンジして提供することとなった。来店するお客さんや子ども，スタッフ・運営者へのアンケートを行いながら味付けやトーストに挟み込む具材を検討していっている。また，ほっこりランチのチラシやメニュー作成の補助を担ったり，子供クラブ事業がどのような背景で始まり，現在どのような居場所となっているのかをまとめた「ほっこり新聞」の作成も行った。

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

コロナ禍ではあったが，受入先の方々の積極的なご協力とご厚意により，受講生は定住外国人等はじめ地域で多文化共生を推進するさまざまな人々と直接に交わる機会に恵まれた。その交わりを通じて，受講生は多文化共生まちづくりの課題を当事者視点から捉えるということを一定程度行えたのではないかと思われる。同時に，受講生の語りやレポートからは定住外国人等であるという側面だけで当事者を理解しようとしたり，関わろうとしたりすることで生じる問題にも気づいたことが読み取れた。定住外国人等というカテゴリーに個人を入れてステレオタイプ的に理解するのではなく，その個人にとって定住外国人等であることがどういう意味を持っているのかを聴き，丁寧に捉え直していく姿勢の形成につながったのであれば，多文化共生社会を創り上げていく市民性の涵養を進める一つの機会となったと考えられるだろう。

ただし，学生の問題意識の明確化や企画テーマ設定で時間を要した点は今年度の課題である。そのため，今年度も後期後半では活動成果を形にすることに傾注することとなり，理論的な観点から考察を深めていく熟慮／対話の時間が十分にとることができなかった。実習活動中のできごとに関する批判的省察を深める方途を見いだしていきたい。

報告会プレゼンテーション資料

2022年度 活動報告

多文化共生の
コミュニティ・デザイン

年間活動スケジュール

〈前期〉
- 事前学習（在日外国人の現状や歴史的背景、海外比較から見える課題を知る）
- 東九条フィールドワーク
  （希望の家、ほっこり、エルファでのオリエンテーション／京都市南区）
- チームごとに現場に入っての活動を始める。

〈夏季休暇期間〉
- 鶴橋フィールドワーク（NPO法人IKUNO・多文化ふらっと／大阪市生野区）
- 北野フィールドワーク（NPO法人まなびと／神戸市中央区）

〈後期〉
- チームごとに課題を設定して企画を提案・実施する。

東九条地域（京都市南区）

コミュニティカフェほっこり（NPO法人東九条地域活性化センター）

コミュニティカフェ「ほっこり」

戦前から差別と抵抗の歴史を有する東九条地域
- 京都市最大の在日コリアン集住地
- 隣接する崇仁地域は京都市最大規模の同和地区
- 日本自立生活センターの設立による重度障がい者の地域共生
- **人口の減少や高齢化による空き家の増加**

社会的マイノリティ同士の助け合い・支え合いの歴史的背景から、誰もが自分らしく共に暮らせる居場所を目指

多文化共生、地域福祉などの取り組みを通じて地域の活性化を図るために、南岩本町の市営住宅空き店舗を借入、コミュニティカフェ事業がスタート

ほっこりでの活動

ほっこりの主な取り組み

432市、ほっこりマルシェ、ほっこりラジオ、ほっこりライブコンサート、**土曜日ランチ**、**子どもクラブ**…

- 学童保育の料金が上がる
- 親の仕事が忙しい
- フィリピン人の親を持つ子どもは家庭学習が困難

放課後の居場所として
→**子どもクラブ**が始まる

- 定住外国人女性・子どもを支援
- 定住外国人スタッフを雇用
- 新メニューを開発
- 食文化から異文化体験を得る

多文化交流の場として
→**土曜日ランチ**が始まる

土曜日ランチ

京都コリアン生活センター　エルファ

- エルファの主な取り組み

  在日コリアンをはじめとする、多文化に背景を抱える人など多様な方々への支援。**高齢者支援事業**、障害者支援事業、多文化共生事業、子育て支援事業など幅広い取り組みを行う。

- デイサービス

  在日コリアンや朝鮮ルーツの方を中心に
  多く利用されている
  食事や入浴の介助、体操や歌
  基本的に一人一人すきなことをする
  （花札、塗り絵、テレビ視聴etc.）

エルファでの活動

主に利用者の方々とのお話

- 日本に来られた背景や歴史について
- 家族について
- すきな食べ物や得意なこと
- 健康への気の遣い方
- **料理へのこだわり**

「日本のキムチはおいしくない！」
という声が多数

⇒利用者さんから本場のキムチを習って実際に作ろう！

エルファの料理隊長・呉さんも納得のいくキムチ完成！

希望の家

東九条では、高齢化・過疎化が進んでいる
→コンビニやスーパーが周辺になくなってくる

買援隊

スタート

→毎週木曜日9:40～10:10
ダイエーの移動販売車が来る

活動を通して得た学び

希望の家：現地の人とのコミュニケーションを通して何が問題になっているのかやその人が抱えている歴史的な背景を知ることができた。資料を見るだけでは伝わらないことが現地に訪れて知ることができることを学んだ。

エルファ：会話を重ねるごとに利用者さんの方々の好きなものや得意な事など個性豊かなお話を聞くことができた。朝鮮ツールの人々の暮らしや歴史的な背景、文化や生まれの違いから生じる困難などを学ぶことができた。

ほっこり： 関西における代表的な社会的不利地域の一つである東九条の歴史と現状を学ぶことができた。在日コリアン、被差別部落民、障がい者、高齢者など様々な背景を持つ人々との出会いは、自分が既存の観念から解放され、多様な生き方に触れて知見を深めることができた。

ご清聴いただき
ありがとうございました

ポスター①

ありのままで笑顔と喜びに満ちた「エルファ」

1. エルファとは

・NPO法人京都コリアン生活センターエルファ
・1999年、居宅サービス事業所として京都市南区に設立。
・在日コリアンをはじめ、外国籍や多文化を背景に持つ高齢者のための介護事業を中心に障害者支援、子育て支援、多文化共生実現のための活動を行っている。

2. ハルモニ（おばあちゃん）、ハラボジ（おじいちゃん）のライフヒストリー

Q＆A
Q.いつから日本に
　A.幼い時（1歳・6～7歳・20歳頃等）
Q.どこに住んでいたのか
　A.大阪、京都、滋賀、東京など
Q.若い頃は何していたのか
　A.日本の学校や朝鮮学校に通っていた
　　飲食店やスーパーの経営をしていた等
Q.ご家族は
　A.若い頃に結婚し、息子、娘、孫がいる
Q.自分にとってエルファとはどういう場所か
　A.ほかのハルモニ、ハラボジと会話ができる
　　同じような仲間がいる

たくさんの会話を進めていく中で圧倒的に多かった意見が「キムチの味が違う」ということ。
これは課題なのでは、、、と思いつき、キムチ作りを教えていただくことに。

3. キムチ作りに挑戦！！！

現役でキムチを作り続けているハルモニの指導のもと2日かけてキムチ作りを体験。
キムチ作りと同時にインタビューをしていくと、「キムチがちがう」という理由が露わに。
白菜やにんにくは柔らかさ・味が異なり、粉末唐辛子は韓国のものが綺麗に仕上がる。また、家庭によって作り方や材料、風味が異なるため、再現しづらいという理由があった。

キムチ作りは、材料集め、白菜の塩漬けの際の塩加減などこだわりポイントがたくさんあり、簡単には作れないものだと感じた。

4. キムチ作りを通して

キムチ作りを通して得たことは、ハルモニ、ハラボジ自身の力を発揮できる機会を作っていくこと。
自分自身の得意なことや好きなことがあることで生きがいにもつながる。
持っている力を引き継いでいくことも大事であり、思い切った事をしてみるのも大事。
そこには関係性が重要であり、ハルモニ、ハラボジとの些細な会話も大事にしていく。
ハルモニ、ハラボジが持つ力を発揮することで「ありのままで笑顔と喜びに満ちたエルファ」に。

ポスター②

東九条地域活性化セーター

コミュニティカフェ　ほっこり

日本自立生活センター・ワークス共同作業所に通う重度障害者であり、書家である小松潤誠さんが書いた看板

背景

戦前から差別と抵抗の歴史を有する東九条地区は
在日コリアンたちが長年にわたって生活の改善を求める住民運動を展開してきた。
1993　年に日本自立生活センターが東九条に飛び込んできた。
人口減少や高齢化により、空き家や空き店舗が増加し続けているが、
京都市立芸大の崇仁への移転を機に、京都市が「京都駅東南部エリア活性化方針」を策定した。
2018　年に一般公募で南岩本市営住宅空き店舗を借りてコミュニティカフェ事業を開始した。
誰にも包摂し、様々な背景を持つ人々が自分らしく共に暮らせる居場所を目指している。
周りの　NPO 団体と協力で買い物支援、外国人女性・子どもの生活支援、地域の情報発信など幅広い取り組みを行う

東九条、崇仁地域の住民たち
偶然ほこっりの前を通りかかった人々
東九条地域を応援してくれる NPO の人々
日本自立生活センター（JCIL）の重度の障害を持つ人々
音楽でほっこりとのつながりを生めるフィリピン人女性たち、
東九条を文化芸術創造の拠点とするまちづくりを行うアーティストたち
フィールドワークのために東九条に飛び込んだ京都市内諸大学の先生と学生たち
…
多くの人と出会って、過去の出来事を話しながら東九条の未来を紡ぐ。

「1970 年代半ば初めて足を運んでいた時に、東九条が貧困だった」

「昔は、外来者に対する警戒心が強かった」

「今、支援が充実」

「今は、住民と仲良くなる」

しかし、差別や貧困に苦しんでいた人々は、心を開きにくい。薬物依存、アルコール依存問題が残っている。

来店者のうち半分が 65 歳以上！
居酒屋と揶揄される？
↓
新メニューを提案

ほっこりでの活動

年末生活緊急支援

不安定な雇用環境に置かれる多くの外国人労働者は、年末年始の収入減により、生活が厳しくなる。
定住外国人労働者に配付する物品は事前申込み情報から世帯人数・構成や年齢などに基づいて注文制されていたものであり、私たちが袋詰めや段ボール潰しなどの作業をしていた。

土曜日ランチ

フィリピン人女性のバイトを機に、2021 年 4 月から多文化交流・食文化体験を目的とした土曜日ランチが始まる。

主なボランティアさんはフィリピン人女性を中心とした多国籍バンド（JAPINONG SESSIONISTA）のメンバーで、
ランチの収益金は、定住フィリピン人女性と子どもの支援金として使われている。

現代福祉学科 3 年生：勝田元基
㎜学科 3 年生：陸如藍

子どもクラブ

外国人ルーツの子どもの放課後の活動をサポートするために、2022 年 6 月から京都大学安里和晃先生と学生たちの協力で子どもクラブが始まる。16 時からは宿題、その後公園で遊んだり、ゆったりとした時間を過ごしている。2022 年 10 月から私たちはボランティアとして子どもクラブに加入している。

ポスター③

希望の家
買援隊での取り組み
希望の家とは
正式名称：京都市地域・
多文化交流ネットワークセンター 希望の家
希望の家では児童館の運営、
にこにこやの運営、語学教室、バザー、
季節行事、買い物の援助などをしている。
ディフリー神父によって作られ、多文化共生を
目指している。
課題
朝が早く来にくい
木曜日あることを忘れてしまう
高齢者だけでなく、子育て中のお母さんなど
色々な人に買援隊を利用してほしい
今後も続けていくために売上を上げていきたい
現在：9～22人　15万円程
目標：20人　20万円
京都駅
SUPERMARKET
イオンモール
希望の家
鴨川
東九条のイメージである虹
希望の家の利用者の方の
好きな色で作成
毎週木曜日
9:40～10:10
移動販売
買援隊
背景
歴史的な背景から差別されていた東九条
朝鮮・韓国籍の人も多く住むようになり、
今でも多くの韓国・朝鮮出身者が住んでいる。
その影響で現在は中国、ベトナム、フィリピンなどから
移住してくる人が増えている。
朝鮮のルーツを知らされずに育った人、
隠して育った人もいる。
様々な過去を持った人が集まってきており、
日本各地の出身者がいる。
現在、高齢化・過疎化が進んでる。
朝鮮朝顔が希望の家に
咲いており
買援隊の利用者の
方の間でよく話題に
上がっている
買援隊とは？
買い物に困難を抱える人が多い
→過疎化により店がない、
歩行や荷物を持つことが困難など
そこから移動販売の取り組みが始まる
希望の家や、民生、社協、包括など
様々の人の協力で行ってる
今後について
買援隊の場を通して、
お節介を焼きあえる場を作る。
買援隊を運営していく皆さんが
やりがいを感じながら続けていける。
様々な過去を守る人が一緒に
未来を作っていくきっかけに
なるような場所にしていく

障がいをもつ子ども達の放課後支援

担当教員：土田美世子

（1）取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトは「障がいをもつ子ども達の未来に向けた共生社会の実現」をテーマとする。プログラムでは、放課後等デイサービス「ゆにこ」での実習を通じて、障がいをもつ子ども達との関わり方を学び、子ども達の未来につながる支援について考える。

ひとりひとりの子どもとの関わりを通じて得た理解と共感をもとに、「共生社会の実現のために何が求められるのか」について考察を深め、受講生が共に学びあうことを、プログラムの最終目標とする。

（2）2022 年度の取り組みの紹介

本プロジェクトは、放課後等デイサービス「ゆにこ」で行う週 1 回の実習を活動の核とする、半期(前期)のプログラムである。2022 年度は受講生が増加したため、昨年度の実習先である「ゆにこ神領」に加え、「ゆにこ青地」でも学外実習を依頼した。

プログラムは、①「ゆにこ」での実習に関連した学内での学習、②基本的に週 1 回の「ゆにこ」での学外実習、③共生社会実現に向けた考察、の 3 つのパートから成る。基本的には①から③に向けて時系列で学びを進めていくが、実際には①～③を行きつ戻りつしながら、らせん状に学びを深めていく。各パートについて、簡潔に紹介する。

①学内では、まず、a.障がい特性についての理解、b.応用行動分析を用いた子どもの行動理解、の講義を実施する。また、学外実習開始後は、各自の子ども達との関わりの場面を日誌に記述することで振り返り、授業内で受講生が共有・考察することで、ひとりひとりの子どもの個性、「ゆにこ」の役割について理解を深めていく。プログラム後半では通所児童の保護者からの講話を受け、利用児童に対する家族の思い、家族にとっての「ゆにこ」の役割について、学ぶ機会をもった。

▲お話くださった保護者

▲授業の様子

②「ゆにこ」の実習では、利用児童の受け止めのためのミーティングから、送迎、活動への参加、後片付けとミーティングまでの、半日～1 日の実習を実施する。活動の中で学んだことや疑問に感じたことは、その場で職員にたずねてフィードバックを得た。また、実習後に「日誌」を作成し、指導担当者からコメントを得ると共に、学内の授業でも日誌を活用して学びを深めた。最終盤では、ひとりの子どもの支援について「個別支援計画」を作成し、子どもにとっての「ゆにこ」の役割や、より良い支援について考察を深めた。

③学外実習終了後は、報告書の作成等のまとめ作業を通じて、共生社会の実現に向けての考察を深めた。また、ゆにこ代表取締役からも総括の講話を受けた。

▲実習の様子

▲実習の様子

▲実習先の施設長からの講話

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

コロナ禍が落ち着いたことで、今年度は当初の予定通りの学外実習を実施することができた。子どもたちと出会う回数が増えることで、個別の障がいや個性についての理解が進むと共に、自分なりの支援について工夫する姿が観察できた。

受講生が増えたことで学びあいの密度は高まったが、履修動機が多様になったこと、学外実習先が 2 か所になったことで、担当者との連絡調整が不十分になる場面もあり、次年度以降の課題となった。また、最終的な目標である「共生社会形成に向けて」の考察は、十分なワークの時間を確保できたとはいえず、半期プログラムの時間的制約をどう工夫していくかについては、引き続き検討が求められる。

（＊下記は実習まとめでの受講生の学びより）

・*短期間でも利用者の成長を感じた*

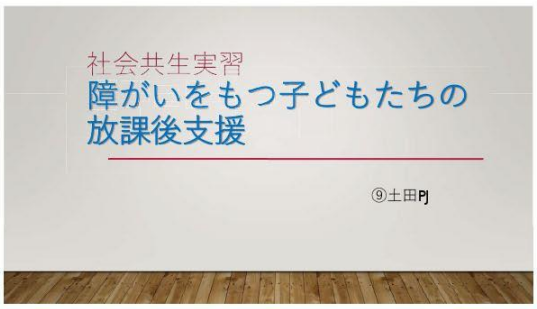
実習期間は2ケ月という短期間だったが子供たちのなにかを達成する瞬間や、新しく何かができるようになった場面に遭遇することができた。

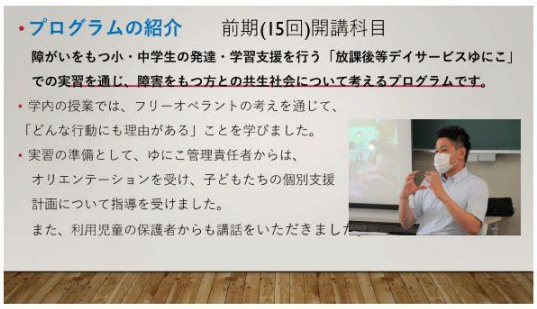
・*声のかけ方ひとつで気持ちを変えられる*

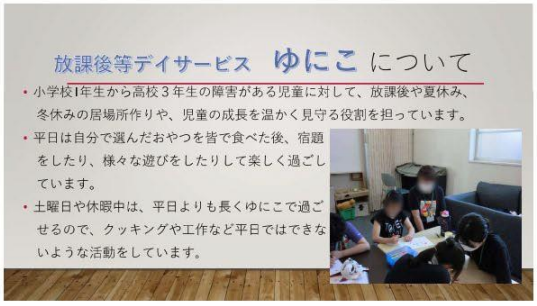
次の行動を促すときや、注意をするときに相手の性格や長所、特性を生かした言葉がけをすることで、相手の気持ちの切り替え具合やその後の行動が順調にいく。

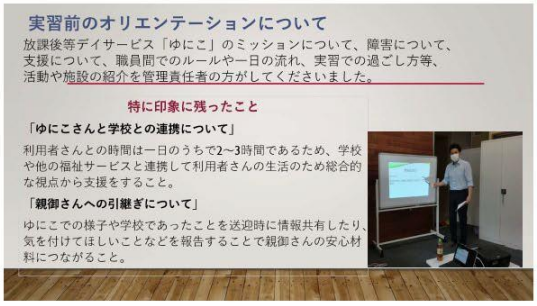
→利用者の性格、特性、得意不得意、好きなこと、苦手なことを把握しているからこそできること。

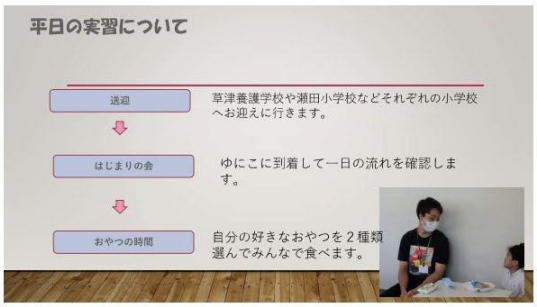
報告会プレゼンテーション資料

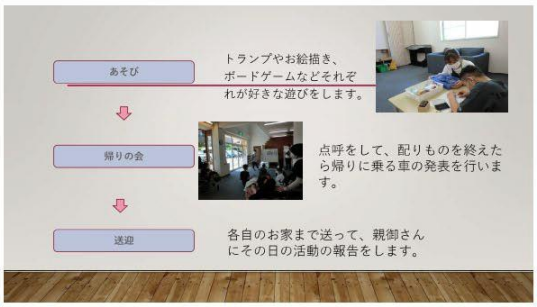


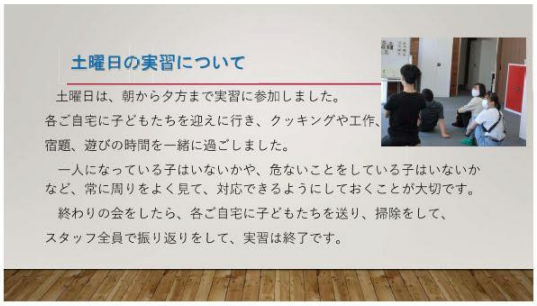


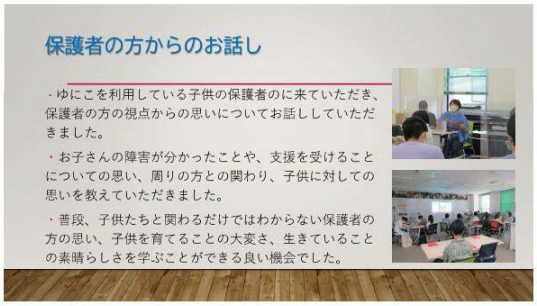












ゆにこ神領について

京阪　唐橋駅から徒歩10分

職員さんの人数

6人

看護師配置あり

医療的ケアが必要な障害児の受け入れ　支援の提供可能

滋賀県内で
医療的ケア児の受け入れ可能な
放課後デイサービスは少ない！

ゆにこ青地

アクセス：JR草津駅から帝産バスに乗車
草津一丁目で下車後徒歩約10分

職員の人数：6人（看護師を含む）
パート＋アルバイト

看護師配置もあるため、医療的ケアが
必要なお子さんも受け入れ可能

ゆにこの活動で学んだこと

一人一人の成長を考えながら

一つのコミュニティで活動していくことの難しさを学んだ

例）○○君はコミュニケーションが苦手で

　しゃべるのが得意ではない

　自分からしゃべろうと頑張っているのを目撃するが帰りの会が始まってしまう→どうしたらベストな行動なのか・・・？

自分自身の観察力のなさ、社会的な視野が狭いことを実感した

伝えたいこと

「障害」という言葉が未知な人もたくさんいるとは思うが

障害をもっているからといってみんな同じということは決してない

むしろ個性の塊！

障害を持っている方と関わることは自分自身の考え方が変わるきっかけにもなる！

・ゆにこは学校や家とも違う第三の居場所

少人数であるため一人一人の対応を丁寧にしてもらえる。

保護者の自由時間の確保（家事、仕事、休息など）

子どもにとっても家族にとっても必要な場所

・子供たち

日によって調子が変わることもある

第三者が思うよりもできることはたくさんある。その瞬間を見逃さない。

かける言葉を変えることでその子の可能性を変えることができることも

察してあげるのではなく自発的に意思を伝えるように促す

心に残ったこと

・短期間でも利用者の成長を感じた

　実習期間は２ケ月という短期間だったが子供たちのなにかを達成する瞬間や、新しく何かができるようになった場面に遭遇することができた。

・声のかけ方ひとつで気持ちを変えられる

　次の行動を促すときや、注意をするときに相手の性格や長所、特性を生かした言葉がけをすることで、相手の気持ちの切り替え具合やその後の行動が順調にいく。

→利用者の性格、特性、得意不得意、好きなこと、苦手なことを把握しているからこそできること。

伝えたいこと

ゆにこのようなデイサービス施設を利用する経験、施設側としての視点で見る機会は決して多いとは言えない。しかし、今後何かしらのかかわりを持つ可能性は全員にある。

方針やこだわりは各施設で異なり、色々な形態があるため一人一人に合った施設を見つけることができる。

実習の初めは「大変そう」という気持ちもあったが、家族、学校、施設での連携が取れており知識のある先生方がいる環境は利用者にとっても私たちにとっても信頼できる場所だった。

個人で全員頑張る、というよりは全員で気づいたことや案をシェアして利用者の成長や安心感を築き上げる空間だった。

障害をもつ人との共生社会について

　共生社会を創るにあたって、障がいに対する考え方や偏見が問題点として考えられます。そのため、まずは障がいの有無で人を判断するのではなく、実際に関わってもらいたいと私は思いました。偏見だけで関わらないという選択肢を選んでしまうのは勿体ないことであり、関わってみると「あぁ、こんなこともできるのか」と新たな気づきと出会うことができます。

　実際、私は実習に行くまで医療的ケアの子と実際に関わったことがなかったためかなり緊張していましたが、同年代の子どもたちと先生方に誕生日を祝われてとても嬉しそうにしていたことや、話しかけるとニコッと微笑んでいたことにとても衝撃を受けました。

　偏見に囚われたり障がい者という枠組みで全てを考えるのではなく、
その人の"個性"を見てもらいたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

ポスター

RYUKOKU UNIVERSITY

2022年度社会共生実習報告会

障がいをもつ子どもたちの放課後支援

障がいをもつ小・中学生の生活支援、発達・学習支援を実施する「放課後等デイサービスゆにこ」での実習を通じ、障がいをもつ子どもたちとの関わり方を学び、障害をもつ方との共生社会について考えるプログラムです。

ゆにことは

放課後等デイサービスといい、
小学校1年生から高校3年生の
障害がある児童・生徒に対して、
放課後や休暇中の居場所作り
子どもたちの自立を促す役割
をしています

【平日利用】

各学校に送迎にお迎え
↓
ゆにこ到着
↓
はじまりの会
↓
おやつ
↓
すごし(あそび・宿題など)
↓
おわりの会
↓
各ご自宅に送迎

【土曜・学校休業日】

ゆにこ到着
↓
はじまりの会
↓
午前のすごし(あそび・宿題など)
↓
クッキング
↓
みんなでお昼ご飯
↓
午後のすごし(室内活動など)
↓
おわりの会
↓
各ご自宅に送迎

実習の紹介

・ゆにこへ帰ってきた子どもたちの受け入れ
・おやつ、宿題、遊びの時間を一緒に過ごす。
　＊ただ単純に過ごすのではなく、一人になっている子はいないか、危ないことはしていないかなど、常に周りの状況に気を配ることが必要。
・子どもたちの帰った後の片づけ
・スタッフ全員で今日の気付いたこと、危なかったことの振り返りを実施

学内実習

実習の準備として、
ゆにこ管理責任者からは、オリエンテーションを受け、子どもたちの個別支援計画について指導を受けました。

ゆにこに通う子供の保護者の方から、
お子さんや自身の思いについてお話を聞きました。
お子さんの障害が分かった時のこと、
子育ての不安・葛藤、周りの方の支援、
制度面に期待すること、我が子への思い等
お子さんと交流するだけでは知りえなかったことを伝えていただきました。
1人の子供が大切に育てられているという事
その素晴らしさ、命の尊さを学ぶ良い機会となりました。

障害をもつ人との共生社会について

共生社会を創るには、障がいに対する考え方や偏見が問題点となります。
まずは障がいの有無で人を判断するのではなく、実際に関わってみてください。
偏見だけで関わらないという選択肢を選んでしまうのは勿体ない、関わってみると「あぁ、こんなこともできるのか」と新たな気づきと出会うことができます。

実際、私は実習に行くまで医療的なケアが必要な子どもと実際に関わったことがなかったため、かなり緊張していました。
でも、同年代の子どもたちと先生方に誕生日を祝われてとても嬉しそうだったり話しかけるとニコッと微笑んでくれたことに衝撃を受け、ひとりの子どもとしてみることの大切さを知りました。

偏見に囚われたり障がい者という枠組みで全てを考えるのではなく、
その人の“個性”を見てください。

実習に参加して

実習の初めは「大変そう」という気持ちもあったが、家族、学校、施設での連携が取れており知識のある先生方がいる環境は利用者にとっても私たちにとっても信頼できる場所だった。

短期間でも利用者の成長を感じた
実習期間は2ケ月という短期間だったが子供たちのなにかを達成する瞬間や、新しく何かができるようになった場面に遭遇することができた。

コミュニケーション
コミュニケーションと聞くと言葉を連想していたが、同じ遊びや活動を通してもコミュニケーションがとれることがわかった。

声のかけ方ひとつで気持ちを変えられる
次の行動を促すときや、注意をするときに相手の性格や長所、特性を生かした言葉がけをすることで、相手の気持ちの切り替え具合やその後の行動が順調にいく。
→利用者の性格、特性、得意不得意、好きなこと、苦手なことを把握しているからこそできること。

障害を持っているからといって個性がないことは決してない

むしろ個性の塊！

障害を持っている方と関わることは自分自身の考え方が変わるきっかけにもなる！

自治体を PR してみる！

担当教員：岸本文利

（1）取り組みの趣旨・目的
映像で自治体を PR する事を通じて、PR の本質を知る。どうすれば多くの人に見てもらえるか、どうすれば共感できる映像コンテンツを製作できるかを実習を通じて知る。また、取材することは、交渉を通じて相手との信頼関係をいかに構築するかが重要であり、それがユニークな面白いコンテンツ制作の原点であることを理解してもらう。

（2）2022 年度の取り組みの紹介
1 年目の受講生は大阪府門真市の PR コンテンツを制作し、2 年目の 4 名と 1 年目の 1 名の受講生は滋賀県高島市の棚田の PR コンテンツ制作にあたった。門真市プロジェクトでは受講生 7 名が 7 本の動画コンテンツを制作。以下、7 本の作品タイトル、アバターを使った漫才による PR 動画などユニークなチャレンジをした作品もあった。

@オーケストラがある街！（門真市拠点の関西フィルハーモニーを PR）

@門真市のユニークな職員を紹介

@門真市を歩いて縦断してみた！

@カドマイスターって知ってますか？（門真市の地元企業を紹介）

@門真市あるあるアバター漫才！

@子どものキャリア教育！

@子どもロビーを紹介

昨年度同様、2023 年 4 月以降、門真市のホームページで順次アップされる予定。
また高島市棚田 PR は 2022 年 10 月の全国棚田サミットの PR のために半年で 14 本を制作。サミットの会場でも学生等が制作した動画が上映された。

▲ドローン講座の様子

▲ドローンを操縦する受講生

（3）2022 年度の取り組みの成果と課題

門真市のプロジェクトでは、前年度の複数人によるチームと違って個人で 1 作品を制作させたが、負担が重かったのか、取材、編集の進捗が極めて遅かった。このため、来年度は 3 年目の受講生はチューターとして 1 年目、2 年目の受講生のサポート兼相談要員としての位置づけも考えたい。ただ、1 年目の成果を受けて門真市から職員採用の動画制作を委託されるなど市役所内部での認識が高まっていることは、動画制作の有用性が評価されたものと考える。

棚田プロジェクトでは高島市からも大手 PR 業者に委託するより極めて安い委託費で高品質な動画作品を多数アップできたことで高い評価を受けた。ただ、来年度はサミット終了に伴い行政予算がない事から棚田の PR から撤退も考えたが、畑地区の地元から引き続き動画制作を強く要請されたことから、本数は減らすものの 2 年目以降の受講生を投入し、コンテンツ制作を続ける方針。受講生の要望もあり、ドローンを使った映像制作にも挑戦する。

また、これまではコンテンツ制作に重点を置かざるを得ず、視聴回数のアップなどプロデューサー業務には全く力を入れられなかったが、来年度は 2 年目以降の受講生はこうした動画コンテンツの視聴回数をどうやって増やすかも実習のテーマに入れて考え、実行してもらおうと考えている。

報告会プレゼンテーション資料

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

社会共生実習
「自治体をPRしてみる！」

2022年1月13日
社会部学部
早藤涼花
春木大河

教員スタッフ紹介

担当教員

内閣府防災SPセミナー元講師
日本PR協会講師
日本経営協会講師
日本広報支援機構特別顧問
滋賀県広報の在り方懇話会座長

・岸本文利
1984年松下政経塾入塾
1986年MBS入社
取材する側
大阪府政記者クラブ、経済部等を経てニュース、経済部デスク
ドイツ・ベルリン支局長時代はイラク、アフガニスタン、イスラエル等で取材、帰国後、VOICE企画デスク、編集長など20年間報道現場で取材・指揮
取材される側
2008年～17年までコンプライアンス室広報部長等
2020年MBS退社

カメラマンです

・南川二郎（みなみかわ　じろう）
毎日放送報道局元カメラマン
JNNベルリン支局カメラマン、K2など山岳取材多数

現在
龍谷大学非常勤講師

編集マンです

・澤村譲（さわむら　ゆずる）
「ビデオユニテ」（番組制作会社）元社長
報道編集、番組制作ディレクターなどを務めた

現在
龍谷大学元非常勤講師
京都産業大学元非常勤講師

何をするの？

映像で自治体をPRする

この実習の狙い！

PRの本質を知る！

映像制作スキルを身に付ける

どの自治体をPRしたの？

大阪府門真市！

門真運転免許試験場があり、
地下鉄、京阪、モノレールが乗り入れる
人口12万人、面積12.3㎢の小さな自治体

どの自治体をPRしたの？

滋賀県高島市！

滋賀県で唯一
日本の棚田百選に選ばれた
棚田集落のある自治体
昨年10月の全国棚田サミットの
会場でも動画が公開

なぜ門真市と高島市なの？

龍大生のために
協力してくれる
自治体だからです！

どうすればPRできるの？

見たくなるものを作る！

初めて知った！（へぇ～と思うもの）
くだらないけど見てしまう
そんな事になっているんや！
なんでそんな事になっているの？

年間スケジュールは？（門真P）

4月・・・ガイダンス（2回）、撮影研修（2回）
5月・・・編集研修（3回）
6月・・・門真市現場研修・取材ネタブレーンストーミング
7～10月・・・取材ネタ探し・撮影
11月・・・ドローン体験講習会
10～1月・・・編集作業
1月・・・作品完成・門真市試写会

一番大変だった事は？

一番驚いた事は？

面白かった事、役に立ちそうな事は？

私たちが作った映像作品は・・・

龍大生貸します！

門真市あるある
アバター漫才！

百聞は一見にしかず！

映像作品の尺が5分程なので
今回は断念

作品制作の狙いと
見て欲しいポイントは？

龍大生貸します！

簡単に言えば、
棚田農家の農作業を
お手伝いしましたが
大変でした！

門真市あるある漫才

アバターと僕の
漫才をみてちょうだい！

他にも・・・門真P5作品が

門真市職員あるある

こどもロビーのキャリア教育って？

カドマイスターって知ってます？

プロのオーケストラがある街！

門真市を縦断してみた！

棚田プロジェクト

棚田の坂を駆け上ってみた！

棚田でソロキャンプした！

棚田農家にお邪魔しました

幻の漬物「畑漬け」って？

田植えを体験してみた！

など他８作品

この後のポスターセッションで
ぜひ作品をご覧ください！

作品は
門真市のHPに
アップします！
棚田P作品は
高島市のHPにアップ
されました！

即戦力の
映像制作スキルを武器に
PRの感性を磨いてみませんか！
来年度はさらに
パワーアップします！

これは広告です

発信情報

WEB

龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ

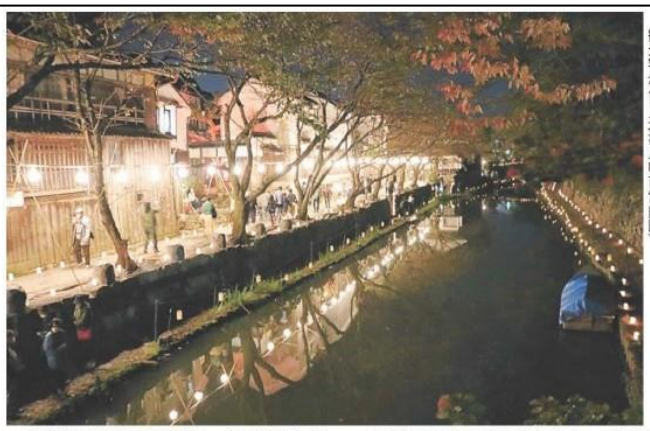
ＵＲＬ：　http：//www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

メディア

① 2022(令和 4)年 10 月 24 日(月) ／京都新聞　（この記事は京都新聞社の許諾を得て掲載しています）

町並み照らす 温かい光

近江八幡・八幡堀まつり



温かい光に照らされた八幡堀でそぞろ歩きを楽しむ市民や観光客（22日、近江八幡市宮内町）

近江八幡市の八幡堀一帯を明かりで照らす「八幡堀まつり」が22、23の両日、開かれた。幻想的なムードに包まれた古い町並みで、地元市民や観光客がそぞろ歩きを楽しんだ。

近年は新型コロナウイルス感染拡大による規模縮小が続いたため、４年ぶりに以前の規模で開催した。今年は、龍谷大の学生らによる夜の八幡堀周辺ツアーや、日中のイベントとして軽食ブースが集まるマルシェなどが初めて企画された。１日目と２日目で色彩の異なる明かりに変える新たな試みもあった。

22日は、約３千個のろうそくやＬＥＤ照明が商家や石畳などを温かく照らし出した。家族連れやカップルが多く訪れ、趣向を凝らした明かりを眺めていた。野洲市から夫婦で訪れた丸山敬二さん(74)は「落ち着いた明かりが町並みに合い、とても風情がある」と話していた。(杉原慶子)

② 2023（令和 5）年 2 月 12 日（日）／京都新聞　（この記事は京都新聞社の許諾を得て掲載しています）

昔ながらの風景 思い出いっぱい

大津百町館で「レトロ写真展」

大津市中央学区の昔ながらの風景や愛着が感じられる物をモチーフとした「中央の記憶 レトロ写真展」が11日、大津市中央1丁目の大津百町館で始まった。訪れた人は、夏の夕涼みで活躍した床机や街角のお地蔵さんの写真を見て、思い出話に花を咲かせていた。

思い入れのある場所や昔ながらの風景など、住民が自ら撮影した写真を展示した会場（大津市中央1丁目・大津百町館）

住民ら 床机やお地蔵さん撮影

龍谷大社会学部の学生が実地で地域活性化を学ぶプロジェクト「地域エンパワねっと・大津中央」の一環で開かれた。同プロジェクトは毎年、実習を受講する学生がテーマを変えて取り組んでいる。

本年度受講した2年小森明日花さん（20）さんら3人は、地域の高齢者が外出するきっかけが少ないと聞き「思い出の写真を見ながら住民が交流できる場をプロデュースしよう」と企画。40～80代の住民約20人にインスタントカメラで撮影に取り組んでもらった。

会場には、休館中の琵琶湖文化館（同市打出浜）や、琵琶湖に浮かぶ環境学習船うみのこなど19枚の写真が飾られている。プロジェクトに参加した会社員谷口和彦さん（61）は「今回の写真で初めて知る地元の話もあった。若い学生が町のことを思ってくれるのがありがたい」と話した。

12日まで（午前10時～午後4時半）。無料。（岡本早苗）

③2023（令和５）年２月12日（日）／読売新聞　（この記事は読売新聞社の許諾を得て掲載しています）

大津・中央学区 思い出写す

住民撮影 龍谷大生が展示会

龍谷大社会学部（大津市）の学生3人が大津市の中央学区の住民に呼びかけ、地元で撮影してもらった写真の展示会が11日、同市中央の大津百町館で始まった。コロナ禍で住民同士のつながりが希薄になったと言われる中、写真を通して交流を深めてもらうのが狙い。12日まで。

3年の宮地喜恵さん(21)、2年の小森明日花さ

大津市中央学区で撮影された写真に見入る来場者（大津市で）

④2023（令和５）年２月 14 日（火）／中日新聞　（この記事は中日新聞社の許諾を得て掲載しています）

地元風景写真 思い出話に花

大津 龍谷大生と住民が作品展

龍谷大社会学部の学生と大津市中央学区の住民が、思い出に残る風景の写真を集めた「中央の記憶レトロ写真展」が十一、十二両日、地元の大津百町館で開かれた。休館中の琵琶湖文化館や街中を走る京阪電車などの写真が並び、市民が思い出話に花を咲かせた。

社会学部の学生が地域とともに地域課題に取り組む実習科目の一環として開かれた。近年、近所付き合いが希薄になっているとの自治会の悩みを聞き、受講する学生三人が企画した。

呼びかけに集まった四十代から八十代の住民十九人がインスタントカメラで地元の「思い出のある場所」を撮影。学生たちが場所にまつわる思い出を聞いた。

会場には一人一枚ずつ選んだ十九作品を展示。古民家を挟んだ細い路地や道脇にたたずむ地蔵、琵琶湖を望む風景の写真などが並んだ。撮影者の思い出を添えて紹介した。

十二日に市内から訪れた保育士の辻浦淳子さん(六六)は「地域の新たな魅力を感じられて面白かった。すばらしい取り組みだと思う」と感心していた。企画した学生の一人、小森明日花さん(二〇)は「写真を通じて多くの人が交流する機会をつくることができた。あらためて人との関わりや交流の大切さに気づいた」と語った。（間宮大貴）

思い出に残る風景写真と、企画した（左から）小森さんと新川真緒さん(19)、宮地喜恵さん(21)＝大津市中央の大津百町館で

⑤2023（令和５）年２月 26 日（日）／中日新聞　（この記事は中日新聞社の許諾を得て掲載しています）

ランタン作り 児童と交流

大津・中央小 龍谷大生がイベント

龍谷大社会学部の学生八人が二十四日夜、大津市中央小学校で、市内の児童約百二十人とランタンを手作りしてともした。

新型コロナウイルス禍で子ども向けのイベントが中止となっていたことから、子どもたちの心に残る催しをと企画した。昨年九月から準備を始め、学校との話し合いを重ねてきた。

この日、学生と児童たちは、商品名などが書かれた外側の紙を外した牛乳パックに、願い事や好きな絵を描いてランタンを作った。ろうそくを模した電灯の上に置き、電気を消すと幻想的な明かりが浮かび上がった。

瀬田南小三年の梅さん(九つ)は「習い事がうまくいくようにと願いを込めた」と話し、小四年の岩原頼さん(一〇)は「牛乳パックのパ

学生をとランタンを作る児童たち＝大津市中央小で

ジ（外側の紙）を外すのが難しく、大学生のお姉さんに手伝ってもらった」と笑顔を見せた。

企画した社会学部三年の山添結衣さん(二一)は「想定と違うことばかりだったが、小学生が楽しんでいたので、開催して良かった」と話した。（和泉萌花）

⑥2023（令和５）年２月３日（金）／文化時報　（この記事は文化時報社の許諾を得て掲載しています）

社会共生の学び発表

お寺や障害者施設で実習

龍谷大学

龍谷大学は1月13日、大津市の瀬田学舎で2022年度「社会共生実習」活動報告会を開催した。お寺でのコミュニティーづくりや障害者施設でのフィールドワークに取り組んだ社会学部の学生らが、1年間の成果を発表した。

同大学では毎年、地域課題などをテーマとした実習プロジェクトを決定し、社会学部の学生が自由に参加できるようにしている。22年度は「お寺の可能性を引き出そう！」や「障がいをもつ子どもたちの放課後支援」など九つのプロジェクトを用意した。

「お寺の可能性を引き出そう！」に参加した学生は、浄土宗西方寺（滋賀県草津市）などのイベント運営に参加。お寺の社会貢献と宗教の可能性を考える部活「寺×コミ」でも活動する村上撮（さつ）さん（22）は「地域の人々にお寺の機能を知ってもらい、お寺が誇りを持てる場となってほしい」と話した。

障害のある児童が通う放課後等デイサービスゆにこ（大津市）で、2カ月にわたる実習を経験した学生らは、保護者の思いを聞き取り、利用する子どもたちと交流したと報告。「障害者という枠組みで全てを考えるのではなく、その人の個性を見てほしい」と話した。

龍谷大学短期大学部講師の福田豊子氏は「ただ学ぶだけでなく、大学生として社会に発信する力があることが実証されたのではないか」と話していた。

⑦2023（令和５）年３月16日（木）17:35~18:00／KBS京都「きょうとDays」にて「いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～」のツアー実施について放映

⑧2023（令和５）年４月19日（水）／京都新聞　（この記事は京都新聞社の許諾を得て掲載しています）

高齢者外出支援 介助旅行

大津の龍大社会学部学生プロデュース

京で第1弾 要望聞き社寺下見 安全な行程考える

外出が難しい高齢者向けの日帰り旅行を龍谷大社会学部（大津市）の学生がプロデュースし、3月に京都で第1弾を実施した。訪問する社寺を下見し、参加者の要望を聞き取るなどして安全な行程を考え、医師らのサポートも得て実現にこぎ着けた。参加者は若者とともに観光や食事を楽しみ、笑顔あふれる1日となった。

3月中旬、京都市東山区の知恩院や円山公園を散策する一行があった。学生が2人一組で車いすのお年寄りに付き添い、階段では持ち上げて移動した。昼食中は談笑しながらも細やかに手助けする姿があった。参加した下京区の芝原澄子さん（92）は「昔よく来た場所にまた来られてうれしい。学生さんたちくさんお話ができました」と喜んでいた。

ツアーに参加したお年寄りの移動を手助けする学生たち（京都市東山区・円山公園）

院ツアー」企画したのは、同学部の「社会共生実習」で学ぶ11人の学生たち。普段は介助が必要で自宅などに閉じこもりがちな高齢者の外出を支援しようと、昨秋からツアーの立案を始め名付けて「まったり知恩

観光や食事楽しみ 笑顔

た。介護旅行サービス会社「ぷ」でも介護（大津市瀬田大江町）の助言を受けた。

学生たちは連携先の川口内科医院（京都市下京区）でお年寄りの要望を聞き取り、訪問先での移動経路やトイレの有無などを入念に調べた。過去2年間も同じ実習で企画に挑戦したが、コロナ禍のため実施には至らなかった。今回は同院の医師が直前まで体調観察を引き受け、介護福祉士が同行するなどして態勢を万全に整えた。同医院のデイケア利用者にツアー参加希望を募り、平均年齢90歳の4人が参加した。

当日は思わぬタイミングでトイレに立ち寄ったり、坂道で車いすの操作に戸惑ったりする場面もあった。同学部現代福祉学科の依田和之さん（21）は「座学では学べないことばかりだった。皆さんが喜んでくれたことが何よりうれしい」と手応えを感じていた。大学は今秋に開講する同実習の中で同じプログラムの継続を予定している。（小池直弘）

参加者（中央）に声をかけながら昼食をサポートする学生や介護福祉士ら

龍谷大学 社会学部
2022 年度 社会共生実習 活動報告書
2023 年 3 月　発行
発行元　龍谷大学 社会学部
住所：〒520-2194　滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1 番 5
TEL：077-543-7760 FAX：077-543-7615
E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp URL：
https://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

公式Webサイト

公式Twitter

公式Instagram

公式Facebook

龍谷大学 社会学部 社会共生実習の
公式 Web サイト ・ 公式 SNS では
最新の情報を随時更新しています！